

伊藤博文の暗殺をめぐる

平 川 紀 一

1. 旅程……101 2. 目的……102 3. 凶變……107
4. 犯人……110 5. 背景……116 6. 裁判……118
 <資料>……128 <あとがき>……134

1. 旅 ¹⁾程

微賤に身を興し、位人臣を極め、内閣總理大臣たること4度、初代の韓國統監でもあった樞密院議長公爵伊藤博文は、明治42年(1909)10月14日午後5時23分、下關行急行を大磯に臨時停車せしめ、一路滿洲視察の途についた。一行は²⁾15日午後8時25分下關着、日清講和の故地たる春帆楼に入り、翌16日鐵嶺丸に乗船、午後1時拔錨、18日午後2時大連着、直ちに遼東ホテルに宿泊、19日は官民連合歡迎会に出席、³⁾20日旅順着、戦跡一巡の後21日旅順發、22日午後6時奉天着、滿鐵公所に總督巡撫以下大官の迎接をうけ、翌28日その答礼として奉天督撫を奉天公署に訪問、2時間余の会談をと⁴⁾げた。⁵⁾25日午後4時ごろ長春着、清國道台の歡迎会に出席、午後11時長春發、運命の地たる哈爾濱に向かった。

註

1) この旅程の日時は、春畝公追頌会『伊藤博文傳』下巻(以下単に『傳』という)、『日本外交文書』第42巻第1冊所収「伊藤公兇變ニ關スル件」(以下単に『文書』という)、田谷広吉・山野辺義智編『室田義文翁譚』(以下単に『室田』という)、坂井邦夫『偉人暗殺史』(昭和12年東京玄林社刊)、木下宗一『号外近代史』第2部(昭和29年東京同光社刊)などを参照して編成した。『傳』には誤脱あり。

2) 『傳』P.864によれば随員は貴族院議員室田義文、陸軍中將村田惇、樞密院議長秘書官古谷久綱、宮内大臣秘書官森泰二郎(漢詩人・槐南)、醫師小山善等となっているが、『室田』P.256には貴族院議員錦鶏間祇候室田義文、式部官伊藤公秘書古谷久綱、公使館二等書記官鄭永邦、陸軍少佐松木直亮、宮内大臣秘書官槐南森泰二郎、宮内省御用係小山善、宮内屬黒沢滋十郎、従者小林勝三郎、従者奥村金之助と總員9名の名を挙げるが、村田惇の名を逸している。『文書』P.193の小村が奉天總領事小池張造に宛てた10月9日付けの電報「伊藤公滿洲旅行ニ関シ通報ノ件」に見える随員は『室田』と同じ。存疑。

3) 『傳』P.864～7。この席上で伊藤が行った演説は、滿洲の機会均等、門戸開放を強調し、日本の官民もこれを常に尊重すべしといい、また清國の改革を直接、間接に援助するのは、日本の義務であるとしている。20日旅順でも同様。

4) 『文書』P.194下段～196上段に、10月25日付け奉天總領事小池張造から小村外相に宛て

伊藤博文の暗殺をめぐる

た、この会談に関する長文の報告書がある。この機密号外は、伊藤の死後11月2日外務省に接受されているが、伊藤が語ったことの要領として、小池が報告しているところによると、伊藤は督撫に対し、自分ノ言フ所ハ日本人タル事ヲ離レテノ言ナリ清國ニテハ此頃頻ニ利權回收ヲ云々スト雖モ右ニ利權ヲ収メテ左ニ之ヲ失フカ如キコトアラハ利權回收モ何等ノ効モナカルヘシ利權ヲ守ルニハ國家ニ實力ナカルヘカラス實力トハ兵力ノ謂ヒニアラス財力ト國家ノ組織トヲ云フナリ國家ノ組織充實シ財力確固ナラサレハ如何ニシテ利權ヲ守ルコトヲ得ヘキヤ清國ハ治外法權ニ於テ關稅ニ於テ其他重大ナル事項ニ就テ利權ヲ失ヘルコト多シ先ツ夫等ヲ回收セスシテ區々タル問題ニ付キ利權ノ回收ヲ云フモ何等ノ効モアラサルヘキ旨ク督撫に語ったという。この會談には、清國中央の意思を伝えるため、左丞代理（侍郎次席）曹汝霖も参加したものと思われる（『文書』P.193下段～194上段、在清伊集院彦吉公使發電）。さらに、滿洲の諸懸案の解決方針に關し、自己の意見として、伊藤が小池に語ったことは、伊藤の思想を知る上で重要である。すなわち鐵道附屬地行政權問題ニ付テハ最モ深ク露國ノ態度ヲ研究スルコトヲ要ス日本ニテ如何ニ強硬ナル主張ヲ維持スルモ露國ニ於テ清國ニ對シ案外交讓ノ態度ニ出ルカ如キコトアラハ日本ノ所為ハ唯世間ノ嗤笑ヲ招クニ過キサルヘシ故ニ此次自分ハ哈爾濱ニ於テ露國蔵相ト會見シ篤ト露國ノ態度ヲモ探リ置キタル後我意見ヲ定メタシ要スルニ今日滿洲ニ於ケル日本ノ行動及日本ノ行政組織ニハ無理ナル處頗ル多シ附屬地課稅問題ノ如キハ清國ノ云フ所ハ篤ト酌量スヘキモノト思ハル又關東都督府カ關東州外ニ行政權ヲ執行シ居ルカ如キハ不都合ノ制度ナリト思ハルルモ其改正ヲ自分ニ於テ言ヒ出ス事カ得策ナリヤ否ヤハ頗ル疑問ナリ滿洲ニ於テ本邦人の賭博場ヲ默認設置セシメ置クカ如キハ滿洲ニ於ケル日本ノ無理ナル行為ノ一例ナリ斷然速ニ禁止セサルヘカラス歸朝ノ上當局者ニ忠告ヲ試ムヘシ高手の威壓手段ヲ以テ清國ニ莅ムノ時代ハ已ニ經過セリ今日ハ獨逸ノ發明タル清國人懷柔籠絡政略ヲ各國ニテ取リ居ルニ付日本ノミカ大言壯語者流ノ所言ニ驅ラレテ高手政策ヲ取ラントスルトキハ遂ニ重大ナル失敗ヲ招クヘシクと述べているのであって、戦勝の餘威をかる軍部やその同調者を批判している。傍線は引用者。以下同。

5) 『室田』P.259による。『傳』P.866には午後7時長春着、清國道台の歡迎會に臨んだとあるが、『室田』の明治42年10月25日、午後4時頃、伊藤は一行を随へて長春驛に到着した。その時一行の中には滿鐵總裁中村是公及び、大内（丑之助）關東都督府民政長官代理等も加はってゐたが、長春驛着と同時に伊藤は内外官民の多數出迎の中に、滿鐵クラブに入って休憩し、同6時半より道尹公署に於ける吉長道尹顏世濟の、藤公歡迎晚餐會に臨み、11時再び一行を随へ、東支鐵道の貴賓車に塔乗し、長春驛を出發したとある記事が詳細で、かつ時間的にも正確と推定される。

2. 目的

伊藤がかねて念願の滿洲行に踏切った直接の動機は、南滿洲鐵道株式会社總裁であった後藤新平がしばしば彼と會合して、熱心に勸説するところがあったからである。すなわち明治42年8月、王世子李垠をともしない、東北地方におよび北海道の歴遊を終えて歸京した伊藤は、當時通信大臣たる後藤と、向島の大倉喜八郎の別邸¹⁾に會し、外遊の機を得たことを告げた。後藤はこれを歓迎しながらも、その歐洲行に先だち、東洋事務主管者で當時ロシア最大の有力者たる大藏大臣 V. N. Kokovtsov (1853～²⁾

?)と會見し、東亞ことに韓國處理につき、あらかじめ日本政府の方針を暗示しておいてはどうかと提案した。伊藤がこれを快諾したので、後藤は駐露大使本野一郎に交渉を依頼した結果、Kokovtsov は10月下旬、東清鐵道視察の名目で ハルビンに赴き、伊藤と會談することを傳えてきた。ここに伊藤のハルビン行が決したのである。³⁾

9月29日伊藤は首相桂太郎を訪ねてその了解を得たが、用談中突然腦貧血をおこし、桂夫人の手當てで回復した。その謝辭をかねて伊藤が桂に送った10月1日付書簡の末尾には、

“旅行の事外相(小村寿太郎)と御相談被下異存無之趣奉萬謝候。小子本日午後可成歸磯仕度候。一兩日中出京、外相可得拜晤候間、同相へ御傳可被下候。

尚亦閣下或は外相其中英大使御面晤相成、英政府の意嚮御聞取相成度候。書外は讓拜光。勿々奉復。⁴⁾”

とあり、事前にかなり綿密な打ち合わせが行われたことを推定せしめる。しかし伊藤の外遊が、単なる漫遊的視察であったのか、あるいは明確に限定された秘密の目的を持つものであったのかは、必ずしも明白でない。たまたま海外視察に出発せんとしていた長男文吉に与えた訓戒の中に、

“今度俺の滿洲旅行には別段使命もないが、支那と云ひ、露西亞と云ひ、將來日本の國際關係は非常に六ヶ敷く、容易ならぬ苦心が要るのだ。哈爾賓より直ぐに引返るか、支那に立寄るか、將た欧羅巴まで行くことにするか、まだ極めてゐない。”⁵⁾

とハルビン以後は未定であるとの注目すべきことばを残している。また11日、靈南坂の枢密院議長官邸に元帥山県有朋の來訪を受けて會談したその夜、桂首相主催の晚餐會に出席、同席していた國際新聞協會員に對する演説では、新聞の使命について述べたる後、

“予は滿洲に遊びたる事なし。多少因縁ある遼東半島にも未だ足跡を印せず。故に一たびは彼所に行かんと宿志あり。今や滿洲と言はば世界の人も八釜しく言ひ居るが如きも、其實無事太平の時なり。今此太平にして且つ氣候好き時に於て宿志を果さむと欲し、予て桂總理の承認を経且つ數日前に勅許をも得たれば、愈々、自分一個の思立にて哈爾賓迄旅行を試みむと欲す。到る處清國人にも露國人にも欣んで會見する機會もあるべし。此行勿論直接の利益なしとするも、歸來滿洲に關する新聞を讀みて了解し得る位の材料を齎らすならむ。諸君の土産になる如き獲物無きを今より斷り置く。此の如き一個の漫遊に過ぎざるものを、萬一にも政略的旅行抔と他より誤解せらるるに於ては、迷惑此上あるべからず。序に一言辯じ置くなり。”⁶⁾

と自分一個の意志による漫遊であることを強調している。小村外相から在英國加藤高

明大使、在清國伊集院彦吉公使に宛てた10月9日付けの電報「伊藤公滿洲旅行ニ關シ通報ノ件」にも

“伊藤公ハ予テ滿洲旅行ノ希望ヲ有セラレタル處今回賜暇ヲ得十六日門司發ノ鐵嶺丸ニテ大連ニ赴キ同地ヨリ北行哈爾賓ニ至リテ更ニ南ニ引返サルル筈右ハ全然^(ママ)箇人ノ資格ニテノ旅行ニシテ何等ノ使命ヲモ有セラルル次第ニアラス旅行期間ハ三四週間ノ予定ナリ”⁷⁾

とあって、私人としての賜暇旅行に過ぎないかのように見えるのである。

しかし、日本の最も有力な政治家として世界に知られ、現に樞密院議長⁸⁾の要職にあった伊藤が、文字通りの漫遊を試みるなどとは、あまりにもありそうにないことである。やはり、日露戦争後の東亜の新しい事態——韓國の併合、滿洲の勢力圏の策定などについて、まずロシアと、ついで清國と基本的な了解點を見出そうとする目的があったものと思われる。⁹⁾

註

1) 『傳』P.855～6。伊藤と後藤の會談の場所に、早くから軍需産業の政商として知られ、中國とくに滿洲に対する投資に最も積極的であった大倉財閥の総帥の別邸が選ばれたことは示唆的である。

2) Vladimir Nikolaevich Kokovtsov は1904年日露開戦直後に蔵相となったが、敗戦後の1905年革命の際首相ヴィッテと衝突して辞職。1906～11年ゴレムイキン内閣の蔵相、ストルイピン暗殺後首相となった。官僚主義者で革命運動を圧迫したが、財政の改善には手腕を発揮。官僚としては自由主義的であったので、社会情勢の逼迫にともない、ラスプーチンその他の反対派の策動のため、14年ニコライ2世によって罷免され、以後17年の二月革命まで単に參議院(皇帝の諮問機関)議員たるに止まった。17年十月革命の翌年に國外へ亡命した。歿年不明。(岩波版『西洋人名辞典』P.525)。なおココフツォフの旧上司であった S. Y. Vitte (1849—1915) は彼を評して“仕事のできる、かなり理知の發達した人物であったが、非常に眼界のせまい純官僚型の男であった。財界の大勢を洞察し、金融の要點を握るような人物ではなかった。それに一身の功利のためには手段を選ばないで、どんな陰謀でも欺瞞でも讒誣でも平気で行うという甚だ感心しがたい習性を持っていた”と能吏ではあるが良心のない男として酷評している。大竹博吉監修『ウィッテ伯回想記——日露戦争と露西亞革命』上巻P.474—5。

3) 『傳』P.855～6 ただし、本野を駐露公使とするは大使の誤り。

4) 同上、P.857

5) 同上、P.860～1

6) 同上、P.862～3

7) 『文書』P.193上段

8) 朝鮮を橋頭堡として、大陸に進出せんとする試みは、日本が古代以来いくたびか企てたところであり、幕末の積極的攘夷論者たちから明治初期の征韓論を経て、ある意味では現在にいたるまで、このような動きがあるといえよう。しかし、その形態や意圖は、時代によって、ま

た人によって、かなりニュアンスの違いがあった。明治期の日本の對韓政策は、一貫して、朝鮮の獨立促進を名として、諸外國の勢力を排除し、日本の獨占的影響下に朝鮮を置こうとするもので、日韓併合という形で植民地支配が完成する。日韓併合については、日本人の中にもさまざまな反對があり、また賛成論者の中にも、その時期や方法について、多くの考え方があった。明治38年12月21日初代の韓國統監として臨んだ當時の伊藤は、日韓併合に消極的であったといわれる。すなわち、韓國を保護國として、その名目的獨立を認めながら、日本との特殊關係を、發展せしめようと努めたのである。(小松緑『朝鮮併合之裏面』P.14、外務省編『小村外交史』P.837)しかし、明治41年9月20日の谷干城の日記に“20日午前8時、伊藤侯を帝國ホテルに訪う。快談1時間計、緻密なる韓國談を聴く。侯の前途の定見は覺支なきが如し”

(『小村外交史』P.837に引用あり)とあるように、伊藤は統監政治にそろそろ見切りをつけていたらしい。42年春、副統監曾禰荒助を伊藤の後任として、統監に任ずる内議のあった際、この交迭に先だち對韓政策の大方針を確立する必要ありということで、小村外相から政務局長倉知鐵吉に、文案作成が指示された。この文案は小村の修正を経て確定草案となり、3月30日總理桂太郎に提出された。韓國併合の大纲を定めたこの文書は4月10日桂、小村が伊藤に示し、兩相の予想に反し、なんらの議論もなく、その同意を得、7月6日閣議決定、同日天皇の裁決を経て、正式に發効した。(經緯については、小松緑『朝鮮併合之裏面』P.15～17の倉知鐵吉から小松宛、大正2年3月10付の覺書に詳しい。『傳』P.1012～5にも再録。なお『小村外交史』P.836以下参照。文書の全文は『文書』P.179～180、外務省編『日本外交年表並主要文書』上巻P.315～6に見え、適當の時機に韓國の併合を斷行すること、その時機到来まで併合の方針で實權を収め、實力の扶植を圖ることなどを定めている)。この文書に同意を与えたことにより、伊藤は併合決行に賛成したことになるが、統監としてはなお保護政策を堅持するがごとき態度で、韓廷や韓國の閣僚に接していたのである(金正明編『日韓外交資料集成』第6巻「日韓併合編」下に収められた「韓國施政改善ニ關スル協議會」と称する大臣會議筆記を見よ)。しかし、早晩併合斷行に決した以上、米資本の進出に對し、共通の利害に立つにいたったロシアの反應を打診し、早急に了解をとげることが、伊藤の滿洲行の少くとも主要目的の一つであったと推定できる。なお、黒龍會編『日韓合邦秘史』は、いわゆる民間志士の運動と、かれらの眼に映じた日韓兩國上下の動きを知る上で重要な資料たるを失わないが、内田良平等の貢獻を誇張するあまり、伊藤が内田のたびたびの説得によって、滿洲行の直前によく合邦斷行に賛成したかのように述べているのは問題である。(『日韓合邦秘史』下巻P.152～5)。42年初夏、韓京を辞さんとする際に伊藤は、有力な一部下に“併行は日露戰役後直ちに斷行し置くべかりしに”と語り、これを聴いた部下が“列國關係が面倒ならざりしや”と質問したのに、“否な格別のこともあらざりしならん”と答えたという實話もある。(『小村外交史』P.839)

9) 伊藤の滿洲行の事情およびその目的について『室田』P.252～6に次のような説明がある。室田義文は旧水戸藩士であったにもかかわらず、長閑の伊藤の特別の知遇を受け、滿洲行にも首席の隨員として従ったことから見て、その意見は参考とすべきものがある。

“明治42年6月15日、伊藤は再び樞密院議長に轉じ、伊藤の後任として曾禰荒助が、統監の任についた。伊藤は7月1日大磯を發して渡韓、韓國皇帝(李王)及び太皇(李熙)に謁見、在任中の優遇に対する御禮を言上し、朝野の招宴に臨み、7月15日仁川を拔錨歸國した。そして暫くは閑地につき、静養するつもりであった。が、國事はいよいよ多端複雑化し、大政治家伊

伊藤博文の暗殺をめぐる

藤をして瞬時も閑地につくことを許さなかった。

と言ふのは、かうである。伊藤が、韓國を特に我が友邦以上の關係に於かんとしたその重なる理由を明かにすれば、日清、日露の兩戰役が、それを如實に物語る。凡ゆる東亞に於ける國際間の紛争が、尽く韓國を中心として勃發してゐる。されば韓國は、日本の平和を保つ上にも、是非日本と特別なる關係に於かなければならぬは勿論ながら、東亞の平和を保つ上には何としても韓國の平和を絶對に置く必要がある。ところが韓國自體としては、到底自國の平和を保つだけの力がない。つまり韓國は清國が強ければ清國、露西亞が強ければ露西亞、日本が大勝すれば日本と常に何れかの國に依頼し、變節するところがある。このことが韓國を中心として各國のあらゆる紛争の根源をつくると言つても過言ではない。よつて東亞の平和を保つためには韓國は世界何れの國を問はず指一本ささせない國としなければならない。かうした建前から、日本は韓國を庇護するばかりではない。韓國に對する各國の領土の野心の進出を阻止する必要があつた。加ふるに、韓國自體として考へて見ても、それが最も安泰なる途である。しかし、伊藤のさふした考へに對して、韓國民の中には、必ずしもさう見ないものがあつた。それは、一韓國ばかりではない、政治などと言ふものは凡ゆる角度から見る事が出來、且つ理論づける事が出來るものである。従つて伊藤の苦心するところがなく、日本も韓國を庇護するところがなかったとしたならば、韓國は相もかはらず清國や露國の屬國のやうな關係を繰り返して居り、國民は一日として安住することも出來なかつたことは必定である。しかし、伊藤等が凡ゆる犠牲を拂つて韓國を泰山の安きに置き、引いては東亞の平和を保たうとした並々ならぬ苦心を、誤つた韓民の中には全然逆にとるものもあつた。要するに韓國自體の中に、凡ゆる政治的對立があり、更に、各國を背景とせる結社も無數に介入し、加ふるに新旧思想の争鬭も頗る激しく繰返された。かくして韓國は、日清日露の兩戰役によって日本の庇護下におかるに至つた。とは言へ、それがため東亞の平和が確保されたかと言ふに必ずしもさうでなかつた。と言ふのは、各國は表面的には國際間に於いて東亞の事情は何等の紛争なきが如く、頗る静謐を装つてはゐたけれど、依然ことあれかしと裏で各國共毒爪を鋭ぐと言つた關係に於かれてゐたのである。それについて最も宸襟を悩ませ給ふたのは、明治天皇である。

畏くも、明治天皇は、東亞の平和を如何にして維持するか、と言ふ問題について深く大御心を用ひさせられ、伊藤等にもたえず御下問があり、ニコラス露國皇帝とも直接御親書を往復遊されたと拝聞する。且つ東亞の平和を維持するには、一韓國ばかりではない。支那も問題である。世界各國が、支那に於ける凡ゆる利權を獲得しようとして、餌をつひばむ鳥の如く密集して來てゐる。そしてたえず紛争をつづけてゐるのである。従つて東亞の平和確立には、どうしても支那を各國の手からときはなつて完全に獨立せしむるの他はない。しかし、支那を一たいどうして獨立せしむるか。支那獨立を名として日本が發動すれば、列強は忽ち黙視しないであらう。同時に露國が單獨でそれをするも同様である。

當時日本と英吉利の間には、日英同盟が締結されてゐた。従つてあと二三國が協約に参加すれば、支那の獨立は譯なく出來る筈であつた。しかも、露西亞は、世界最大の強國として、その邊境を支那と等しくしてゐる。故に日露兩國だけで、完全に相提携するも、その目的はほぼ達せられる。

斯様な譯で、御親書の往復があつた後、

『東亞の平和を確保するには、日本と露西亞が手を携へて支那保全の途を講ずるの他はない、それで日露兩國元首間の御協議として、最も信任すべき使臣をハルビンに於て會商せしめよう。』

と言ふことになり、明治天皇は伊藤にその大任を下し賜ひ、ハルビンに使ひすることを命じ給ふたのである。”

以って往年の東亞認識と同時に、伊藤の滿洲行が私人の漫遊どころでなく、兩國元首間の協議に基づく秘密の会談のためであったことを推測せしめる。

3. 凶

¹⁾ 變

明治42年10月25日午後11時、東支鐵道の貴賓車に塔乗して長春を出發した伊藤の一行には、東京からの随員室田義文等 9 名の他に滿鐵總裁中村是公、同理事田中清次郎、同秘書長龍居頼三、同社員庄司鐘五郎、同天野明、關東都督府民政長官代理大内丑之助および長春まで出迎えに來たハルビン總領事川上俊彦が加わった。そしてロシア側からも東清鐵道民政部長アフナーシェフ少將および營業部長ギンツェ 他十數人が接待員として同乗した。列車が動きだすと間もなく、アフナーシェフは伊藤等を食堂車に招じ、その健康を祝して、シャンペンの杯をあげた。やおら立ち上がった伊藤は、

“自分がこのたびハルビンを訪問するのは、なんら政治外交上の意味を含むものではありません。ただ新しい土地を視察し、天下の名士ココフツォフ氏その他に會見するのを楽しみにしてゐる次第であります。幸ひ一度視ておきたいと思つた滿洲に、餘暇を利用して、天皇陛下のお許しをいただき視察の途に上りますと、たまたま貴國の大蔵大臣が視察にお出でになるといふことで、かつ日露親善の緒にもならんかと思ひ罷り出た次第で、はからずもここで諸君にお目にかかることは、自分の心から満足に思ふところであります。従來自分は、日露兩國間の親密なる關係の必要を感じる、至って切なるものがあります。どうかこの親和の關係が、親しむべき諸君と同席するのを得たる、この汽車中に始まって、ますます鞏固なる關係を助長しうることを期したいのであります。いま、諸君の健康を祝し、盃を舉げたいと思ひます。”と挨拶した。

11時半すぎ、貴賓車に戻つた伊藤は、川上總領事を呼び、室田、古谷とともに、1時間半にわたつて、北滿の事情を聴取した。こうして伊藤が寢台に入つたのは、26日の午前1時を少し過ぎたころであつたが、それからものの一時間もたたぬころ、車室の板壁をたたいて、室田を呼び寄せ、奉書に墨痕あざやかに認めた詩を示した。

萬里平原南滿洲 風光濶遠一天秋

當年戰跡留餘憤 更使行人牽暗愁³⁾

伊藤は“どうも更使の2字がおもしろくないやうに思ふ。あした森(槐南)に見せたいと思ふが、忘れるといけないから書いておいたのだ。ひとつ預かっておいでく

れ” といって室田に渡し、二人はブランデーの杯を交して、再び寝についた。

当時ハルビン・長春間の行程は、急行で6時間、普通列車で8時間を要した。したがって長春を午後11時に発車した伊藤等塔乗の特別列車は、26日午前5時にハルビン着のはずであった。しかし、それでは餘りに朝早く着きすぎるというので、鐵道當局は午前9時ハルビン着となるように計っていた。

午前9時、特別列車はハルビン驛構内に滑りこんだ。伊藤の塔乗した貴賓車は、6輛編成の最後部にあったが、それは驛の1・2等改札口の直前に停車した。ホームの南側には、多數の儀仗兵が整列し、静かに一行の下車を待っていた。ロシア側では、治安の維持に極度の注意を払い、停車場の内外は、官憲によって嚴重に警戒されていた。停車場にはいるには、特に發行された入場券を必要としたが、日本人だけは例外で、なんらの制限もなかった。

儀仗隊の奏楽捧銃の敬礼に答えて、伊藤・室田・古谷・中村・川上の5人が貴賓車から下車しようとしているところへ、大蔵大臣ココフツォフが、東清鐵道副總裁ウェンツェリ、同鐵道長官ホルワット少將等を帶同して出迎え、自ら單獨で貴賓車に乗りこみ、川上の通譯で伊藤と初對面の挨拶を交した。⁴⁾儀禮的な交歓20分ほどの後、ココフツォフはハルビンの治安がよくないことを理由として、昼食を車中に用意させることと、會談も車中で行うことについて了解を求めた。伊藤はこれを了承し、會談には室田と古谷を列席させたいと述べた。ついでココフツォフは儀仗隊の閱兵を求め、伊藤は旅中、正装の準備なきことを理由に一応辞退したが、重ねての懇請に閱兵を承知し、ココフツォフの先導で貴賓車を出た。室田・古谷・中村・川上がこれに續いた。

ホームには軍隊のほかに、露清兩國の官憲、各團體の代表、外國領事團などが待ちかまえていた。伊藤は隨員を従え、部下をつれたココフツォフと並んで、ロシア兵を右翼から左翼へ閱兵し、各國領事團の整列せる位置に進み、代表數人と握手を交し、そこで歩を転じて再び軍隊の方に引き返して數歩進んだ。⁵⁾その瞬間、ピチピチという音、それから爆竹様の物音に続いて、パンパンという銃聲らしきものが聞え、室田は堵列した儀仗兵の間から、股座をくぐるような恰好で、ピストルを突き出している小男を見た。⁶⁾伊藤はよろめいて、室田に支えられ、“やられた”と一言いった。時に明治42年10月26日午前9時30分ごろであった。

現場は大混乱となったが、伊藤は室田・古谷・中村等に抱えられて車内に入り、食堂のテーブルの上に蒲團を敷き、その上に寝かされた。隨行の醫師小山善、居留民團の醫師森橋等が傷を調べ、應急手當を施したが、3發の命中弾はいずれも致命的なものであった。すなわち小山の鑑定によれば、

“公爵ノ負傷ハ第一、右上膊中央外面ヨリ射入シ右胸脇ヨリ水平ニ兩肺ヲ穿通シ左肺ニ留マル第二、右關節後面ノ外側ヨリ射入シ右胸脇ヨリ胸腹ニ穿通シ左季肋下ニ留マル第三、右上膊中央ノ外面ヲ擦過シテ上腹中央ニ射入シ腹筋中に留マル三箇ノ銃創ニシテ第一、第二ノ創傷ハ内出血ニ因ル虚脱ヲ來シ致命ノ原因ヲ爲シタ。”⁷⁾

というのであって、その狙撃の精度は驚くべきものがある。なおこの時、随行者のうち、伊藤の右側後方一步位のところを進んでいた川上は右手に一弾を受け、森は左肩胛部に貫通銃創を負い、伊藤から遠く離れていた田中も足部に負傷したほか、中村はズボンに、室田はズボンとオーバーコートに、穴を明けられていた。⁸⁾

車中に搬びこまれた伊藤は、ロシア官憲から、犯人として朝鮮人が捕えられたと聞くと、ただ一言“馬鹿な奴だ”といったが、室田の差し出すブランデーを一杯飲むと間もなく昏睡状態に陥り、負傷後わずかに30分、午前10時に絶命した。數え年69才であった。

ココフツォフは事件が発生するや、急遽電信局にいたり、ナポリ旅行中のロシア皇帝と駐露大使本野一郎に打電し、貴賓車に駆けつけたが、すでに伊藤死去の後であった。彼は自分の面前で凶行の行われたことを深く詫び、滿鐵社員莊司鐘五郎の通譯で弔詞を捧げた。⁹⁾

枕頭にココフツォフ等の供えた花環を飾った、伊藤の遺骸をのせた特別列車は、ロシア軍楽隊の奏でる葬送曲の中を、午前11時40分ハルビン發、大連に向かったのである。

註

- 1) この節は、主として『室田』P.259～281によったが、『傳』P.870～5および朝鮮總督府『朝鮮ノ保護及併合』（大正6年2月。以下単に『保護・併合』という）を参照した。
- 2) 中村是公（慶応3年11月～昭和2年3月）は、台灣總督府在任中から後藤新平の信任を得、明治39年に後藤の總裁の下で滿鐵副總裁、41年から大正2年まで2代目總裁として草創期の滿鐵経営に当たったほか、關東大震災後、東京市長として復興に尽す。夏目漱石とは大學予備門（後の旧制一高）時代の友人で、『滿韓とてころどころ』は中村の招きで漱石が、明治42年9月2日離京、10月17日歸京するまでの紀行文で、當時の滿州、朝鮮を語る一資料。
- 3) 『傳』P.868による。『室田』P.263では、遠が遠、天が點、行が前となっている。ただ作詩の時を『傳』は、25日旅順長春間の車中としているが採らなかった。なおこの詩は伊藤の絶筆となったもので、室田が持ち歸り、井上馨に贈っている。『傳』P.869。
- 4) 『傳』P.870には、滿鐵理事田中清二郎がフランス語で通譯に当たったとあるが、『室田』P.266～7によれば、ココフツォフが乗車してきた時、特別貴賓室にいたのは伊藤・室田・古谷・中村・川上の5人のみとしているので、これに従った。『文書』P.197上段号外3を参照。

5) 『保護・併合』第1章第10節第1項「伊藤公ノ暗殺」P.259～260にある露國大蔵大臣官房長リウオーフ、ハルビン總領事川上俊彦、式部官古谷久綱、宮内大臣秘書官森泰二郎、滿鐵理事田中清次郎の証言による。『室田』P.270は儀仗兵の前面を、右翼から左翼に進んでいる時に狙撃されたと述べており、領事團のところから引返したとっていない。『保護・併合』P.259に見える露國東清鐵道警察署長心得ニキフォーロフの証言は、伊藤が軍隊の右翼に向かって通行した時、證人も軍隊の後方を、伊藤に並行して進んでいて、ピストルを發射する暴漢を見たとして述べており、伊藤が方向を変えたことに觸れていない。P.258～9にピストルを發射した安重根の自供が出ているが、“露國軍隊ノ前面ヲ通行スル一行中先頭ニ立チタル人ヲ公爵ナリト思料シ其右後方ヨリ先之ニ向ヒ拳銃ヲ連射シ”と述べていることや、伊藤の負傷が總て右側からのものであることからみて、伊藤が軍隊を右に見て進んでいたことは、ほぼまちがいないと推定される。したがって、伊藤は軍隊を左に見ながら、閱兵を終り、踵を返して軍隊を右に見る姿勢となった時に狙撃されたと考えられ、多數の證人の証言に従うべきであろう。

6) 『室田』P.270。この小男が安重根であり、ニキフォーロフが“日本人群集中ヨリ一人ノ兇漢進ミ出テ拳銃ヲ發射シタルヲ認メ”たの同一人物である。なお爆竹様の物音を聞いたと証言している者に小山善がある。『保護・併合』P.259。

7) 『保護・併合』P.260～1による。『傳』P.873は“小山醫師の檢案書に據れば、公の負傷は3箇所の盲管銃創にして、第1彈は右上膊中央外面よりその上膊部を穿通し、第7肋間に向ひ水平に射入して左肺内に留まり、第2彈は右肘關節外側よりその關節を通じて第9肋間に入り、胸腹を穿通して左季肋の下に留まり、第3彈は上腹部の中央に於て右側より射入して左直腹筋の中に留まれるものにして、孰れも致命傷であつた”と述べ、本文と同じ醫師の檢案書によりながら、記述に若干の差異がある。『室田』P.271は“その第一彈は肩から胸部乳下にとどまり、第2彈は右腕關節を突きぬけ臍の側を縫ふて臍下へ止まっている。そして第3彈は、右手臍の側を縫ひ、腹部の皮をすうと切つて外部へそれてしまつてゐる”と述べ、小山の檢案書とは大きな違いを示しているが、檢案書の記述をとるべきであろう。

8) 『保護・併合』P.259～261および『室田』P.277、『傳』P.873～4

9) 『傳』P.874。“自分は此事あるや、直に後藤男爵（新平）、本野男爵（一郎）に弔電を發し、又在東京露國大使には日本政府に弔意を表すべき旨を電報せり。此事に關し自分の心の如何に動揺せしかは諸君の御推察を乞ふの外なし。公爵遭難の當時自分は最も近く公爵の側に在り、且又公爵の下車せらるる以前には、諸君の聞かれたる如く最も愉快に談話を交換したるに、今や斯くの如くにして公爵と別れざるを得ざるは、實に痛歎に堪へず。目下露國皇帝陛下は伊太利へ御旅行の歸途に在らせらるるを以て、自分より直に此事を電奏したが、陛下は自分の報告に接せらるれば、大に痛悼せらるるならんと信ず。”なお本野を公使とするは大使の誤りゆえ訂正。

4. 犯人

伊藤遭難の報は、公私の機關を通じて、ただちに日本に伝えられた。最初に外務省に入った電報は、奉天總領事小池張造から、小村外相に宛てた26日付けのもので、

“伊藤公爵今朝哈爾濱着下車セラレントスル際五六名ノ韓國人ニ狙撃セラレ腹部ニ

二個ノ重創ヲ受ケタリ容體危篤ナリ兇行者ハ直チニ捕縛セラレタリトノ旨只今總督ヨリ急報シ來レリ川上領事ヨリハ未タ何等ノ報告ナキモ醫師派遣方等ニ付本官ハ直ニ都督府ニ協議セリクとあるのがそれであるが、兇行の時機・場所や負傷の箇所・箇数が事實と相違しているものの、狙撃したのが5、6人の韓國人であると傳えていることは、その後安重根一人の犯行に絞られていったこととからんで注目すべき點である。

小池の電報に續いて、伊藤に随行して負傷した哈爾賓總領事川上俊彦からも、相次いで公電が送られ、事件の輪廓は次第に明かとなる。すなわち26日付け小村宛の電報には、

“伊藤公今朝九時着下車ノ際韓國人ノ為數發狙撃サレタリ(中略)公爵遺骸ハ本日十一時當地發長春へ向ヘリ”²⁾

“伊藤公爵加害犯人ハ韓國人「ウンチアン」平壤生住所不定年齢三十一才ナルモノ公爵狙撃ノ目的ヲ以テ元山ヨリ浦鹽ヲ經昨夜當地着停車場附近ヲ徘徊シツツアリシ旨自白セリ依テ直ニ當館ニ引渡ヲ受クル手續中”³⁾

と、伊藤の絶命と犯人の名を初めて報告してきている。ウンチアンとは安重根の字、応七と姓の安を西洋式に轉倒して、朝鮮讀みしたものの音譯であろう。安重根はすなわち、伊藤殺害の犯人として處刑された人物であり、室田がロシア兵の股座から、のぞくようにピストルを構えていた小男⁴⁾といい、ニキフオーロフが軍隊の後に堵列していた日本人群集の中から、進み出て拳銃を發射した兇漢⁵⁾といっているのと同人物である。

しかし、伊藤の殺害者は、はたして安重根であつたのであろうか。彼が伊藤等を殺害する目的でハルビンに來たり、ブラウニング式7連發拳銃を連射している現場で捕えられたことを自認していることから見て、事態はきわめて明白に思われるかも知れぬ。けれども、調べていくと、安重根が直接の殺害者であつた可能性は、ほとんどなかったといわねばならない。その理由を以下にまとめてみよう。

第1に、安重根の狙撃位置と時機については、前節に述べた如く、伊藤が閱兵を終り、領事団と挨拶を交して、身体の右側面を軍隊の方へ向けて2～3間引返して來た時に、堵列した兵隊の後に並んでいた日本人群集の中から、跳び出して來て狙撃したものであることは、伊藤等の負傷の状態や公判廷での數人の證言によって明かである。10月26日付の川上總領事發小村外相宛の電報の中にも

“整列セル露國軍隊ノ前ヲ過キ出迎ノ為參集セル各國代表者露清官憲團體代表者ニ對シ挨拶了リ更ニ引返シテ露國軍隊ノ前面ヲ通過ノ際其列間ヨリ洋装セル一韓人ハ「ピストル」ヲ押出シ公爵ニ對シ數發々射シタリ”⁶⁾

とあり、川上は伊藤の右側後方一步位のところを歩いていたのであるから、この證言⁷⁾の信憑性は高いと考えられ、伊藤の2間程後方を歩いていた室田の見た光景ともよく一致している。また、安重根の公判廷における自供の中にも

“被告も亦同じく露兵の後を微行して機會あれと窺ふ際公は領事団の前より引返さんとせしかば好機逸す可らずとし直に露兵整列の間より約十歩を隔てたる公爵の右側部を目蒐けて續け様に二三發々射したれど果して夫れが公なりしや定かならず漸く服装年齢舉動等に抛りて判斷したるなれば多少躊躇せしも最早覺悟を定めて更に少しく銃口を左方に向け二三發を發射するや整列せる露兵は銃聲に驚き後方に退散し被告は露兵の前面に現れたり、此時露國騎兵二三名左右より支へたれば其勢にて共倒れとなり已むを得ず短銃を投出し大韓國萬歲「コレアウラー」を三唱し露兵憲兵の手に捕縛されたり”⁹⁾

とあり、安重根が軍隊の整列の間から、約10歩をへだてて、伊藤とおぼしき人物の右側から狙撃したことは確実と思われる。しかし、約10歩の近距離にせよ、ピストルを連射して、これをことごとく命中させるのは神業に等しい難事である。そのうえ、銃口を少し左に向けて發射した2～3發で、随員の川上、森、田中3人を傷つけ、室田、中村2人の服に穴をあけたとあっては、あまりの鮮かさに目をこすりたくなる。

第2に、發射された彈丸の數と、使用したとされる拳銃の關係にも矛盾がある。判決理由の説明によると、

“被告ハ押収ニ係ル檢領特第一号ノ一、二、五、六ナル拳銃（番号第二六二三三六号）彈丸彈巢ハ自己ノ所有ニシテ當時被告ノ予備携帯シタルモノナルコトヲ明白シ露清國境地方裁判所始審判事「ストラゾウ」ノ作成ニ係ル檢査調書ニハ第二六二三三六号ノブラウニング式拳銃ヲ分解檢査シタルニ七箇ノ彈丸ヲ裝填シ得ヘキ其彈巢ハ空虚ナルモ銃口中ニ一箇ノ彈丸裝填シアリテ其銃身ハ火薬ノ硝煙ヲ以テ汚レタル旨記載シアリ又押収ノ藥莢七箇（檢領特第一号ノ三）ノ存在スル所ヲ以テ之ヲ觀レハ被告カ當時發射シタル數ハ七彈ナルコト明白ナリトス”¹⁰⁾

というのであるが、これでは7連發の拳銃に8發の彈丸が込められていたか、7發發射の後に、さらに1發裝填したかのいずれかということになり、信じ難い。

第3に、伊藤に盲管銃創を與えた3發の彈丸であるが、拳銃彈ではなく、フランス騎兵銃の彈丸であつたといわれ¹²⁾、ダムダム彈以上に致命的なエキスプレスで、尖端を鑢で切り取った上に十字形の凹凸を作つたものであつたといふ¹³⁾。もし、これが事實であつたとすれば、伊藤を斃した兇器は拳銃ではなく、フランス騎兵銃ということになり、ブラウニング式拳銃を數發發射しただけの安重根は、少くとも伊藤殺害の犯人で

はあり得ない。

第4に、射入角の問題である。伊藤が撃たれた弾丸は、3発とも上半身を右側から、やや斜下に向けて入っており、しかも3発が間髪を入れず撃ち込まれ、その間、伊藤は直立歩行の姿勢を変えていない。したがって発射の場所はある程度高いところがあり、複数の射手によるものと推定される。室田はハルビン驛2階の食堂の格子の間から、斜下に狙ったのだと主張している。¹⁵⁾ いずれにせよ、小男の安の撃ったものではあるまい。

第5に、安は伊藤を知らなかったことである。その自供によると、

“公爵は未だ曾て見たることなく一度某新聞紙上にて其肖像を見しのみなるも大概は見當もつくならんと思ひ”¹⁶⁾

という程度の知識であり、前に引用した狙撃の際の説明でも、

“二三發々射したれど果して夫れが公なりしや定かならず漸く服装年齢舉動等に據りて判断したるなれば多少躊躇せしも”

といっているのであって、伊藤を狙撃したかどうかもあやしい。法廷で“お前は伊藤博文公を知っているか”という問いに

“知りません。ただ背の高い、口髭を生やした人だと聞いております”

と答えていることから見ても、安が狙ったのは背の低い伊藤ではなく、背が高く口髭を生やした人物である可能性が大きい。室田は安が狙ったのは自分であったと述べている。¹⁷⁾

第6に、安重根犯人説に反対していた室田の証言が、公判において採用されていないことである。川上・古谷・小山・森・田中など随員のうちの主要な人物で、現場に居あわせた、ほとんど總ての人の証言が判決理由に採り入れられているにもかかわらず、¹⁸⁾ 首席随員で遭難時に伊藤のすぐ側にいた室田の証言がないのは不思議といわねばならぬ。『室田』はこの間の事情を説明して、

“しかし、安重根が真犯人でないとすると、他の真犯人の逮捕を見るまでは、事件は永遠に片づかぬ。引いてはこのことが日露國交上に支障を來すやうなことになるうやらも知れぬ。そんなことから、山本權兵衛が、それを明かにすることに反対した。そして結局、此の問題は義文の抗議にも拘らず、我が官憲で口を閉じせしめた。由來三十年依然として謎の儘残されてゐる”¹⁹⁾

と述べているが、ほぼ事情を明かにしているのではあるまいか。

第7に、事件當時のフィルムがあったのに、その購入を日本政府において見合わせたことである。すなわち伊藤遭難の翌27日、在哈爾賓川上總領事から小村外相に宛て

て、つぎのように打電してきた。

“伊藤公下車ノ時ヨリ遭難當時及其後停車場内ノ光景ヲ露國寫真師ニ於テ活動寫真ニ撮影シタリ右ハ此際貴重ノモノト存セラルルニ付露國警察部長ノ仲介ヲ以テ該原版譲與方交渉シタル處同寫真師ハ代償トシテ一萬留ヲ要求シ來レリ若シ購入ノ必要アラハ現品一應検査ノ上譲受ニ關スル契約方取計フヘシ尚同人ハ今夜莫斯科ニ向ケ當地出發ノ筈ノ處當館ノ申出ニ依リ警察部長ニ於テ明一日間出發ヲ見合サシメタリ至急何分ノ御回訓ヲ訓フ”²⁰⁾

このフィルムは、川上もいう通り、事件の真相を知る上で、きわめて貴重なものであったが、なぜか小村からの28日付け返電は

“寫真ハ買収ノ必要ナキニ付露國警察部長ノ好意ヲ謝シ買収ハ斷ハラレタシ”²¹⁾
という、はなはだそっけないものであった。

臆測をたくましくすれば、伊藤遭難死の報に接した政府は、ことの重大なるに鑑み、激昂する民心を宥めるためにも、一刻も早く犯人を決定し、極刑に持ちこもうと計ったのではあるまいかと思われる。最初、五、六名の韓國人に狙撃されたと通報されながら、次第に暗殺實行者を安重根一人に絞っていった形跡も窺われる。

第8に、伊藤絶命の直後、貴賓車に駆けつけたココフツォフが、室田に對して、

“犯人は、安重根といふ朝鮮人です。すぐ事件發生と同時に捕へて護送いたしました。昨夜も、騎馬銃を持った怪しげな朝鮮人が三人隣のステーションの附近を徘徊して居りましたので、捕へるやうすぐ返電いたしましたが無事と言ふので、殊更嚴重に警戒を加へたのですが、たぶん、その一味であろうと思ひます”²²⁾
と述べていることである。

隣のステーションとは、哈爾賓の南に當たる蔡家溝であらうが、この驛は安重根等が、伊藤を襲撃するのに適當であるかどうかを知るために、事件の前々日から前日にかけて滞在、調査していた場所である。したがって、騎馬銃を持った3人の朝鮮人も、安等となんらかの關係を結んでいた可能性があり、あるいは哈爾賓の2階食堂あたりから、安と示し合せて、伊藤を狙撃したものであるかも知れぬ。室田が聞いたピチピチという音、それから爆竹様のもの音、つづいてパンパンという音は、伊藤等に向けて、ほとんど同時に、何丁かの騎馬銃と拳銃が発射された音ではなかったろうか。

以上、さまざまな點からみて、安重根が伊藤の殺害者でなかったことは、ほとんど確實と思われる。安が軍隊の後から、彼が伊藤と信ずる人物に向かって、拳銃を放ち、さらに随員と思われる人物に向かっても發砲したことは事實であらう。しかし、その彈丸は随員の何人かを傷つけたかも知れないが、伊藤本人には命中しなかった。伊藤

を斃したのは、驛の2階食堂あたりに潜んでいた3人の朝鮮人が、ほとんど同時に發射したフランス騎馬銃の彈丸3發であったのではあるまいか。しかし、大混乱の現場で、手近かにいた安が現行犯として捕えられ、騎馬銃の3人は、混乱に乗じて逃げさせたのであろう。そして安自身も、伊藤に對し數發撃ったと信じているところから、伊藤殺害の犯人たることを、進んで認めたものと思われる。

註

- 1) 『文書』P.196、上段。
- 2) 同上、P.196、下段。
- 3) 同上、P.197。
- 4) 『室田』P.270、前掲。
- 5) 『保護・併合』P.259、前掲。
- 6) 『文書』P.197、上段。
- 7) 『保護・併合』P.259。
- 8) 『室田』P.270、前掲。
- 9) 明治43年2月9日付け『東京朝日新聞』に見える7日午後1時開廷の公判における安重根の陳述。坂井邦夫『偉人暗殺史』（以下単に『暗殺史』という）P.342～5所収。
- 10) 『保護・併合』P.260。
- 11) 『暗殺史』P.342に見える2月8日付け『東京朝日新聞』の安重根陳述。
- 12) 『室田』P.271、P.279。
- 13) 明治42年10月29日付け『時事新報』の報道。『暗殺史』P.334に引用さる。
- 14) 久米正雄『伊藤博文傳』（昭和6年）P.385。出典不明。
- 15) 『室田』P.271。
- 16) 『暗殺史』P.342～5所引の『朝日新聞』前掲。
- 17) 『室田』P.279～280。
- 18) 『保護・併合』P.257～265に引用の明治43年2月14日付け、關東都督府地方法院判決文。
- 19) 『室田』P.280。
- 20) 『文書』P.200上段。
- 21) 同上。
- 22) 『室田』P.278。
- 23) 『保護・併合』P.258による。『暗殺史』P.342所引の新聞に見える塞河口はその當て字であろう。なお、『文書』P.207の小村から川上、曾弥（韓國統監）宛11月2日付け電報には“露國大使ハ今回在哈爾賓露國總領事ヨリ接手セル電報ノ寫ヲ本官ニ送付セリ其要點御含迄左ニ内報ス。

日露兩國領事館ノ協議ニ依リ露國司法官憲ハ日本總領事館員立會ノ上事實ヲ査問セルニ伊藤公ノ暗殺ハ政治上ノ理由ニ基ケルカ如ク兇行者ハ公ノ爲ニ害毒ヲ受ケタル故國ノ仇ヲ報セムカ爲此舉ニ出テタルモノナリト云ヘリ兇行ハ韓國内ニ於テ計畫セラレ其實行ノ任ヲ託セラレタル者少クトモ三名ハ韓國ヨリ來レリ哈爾賓ニテハ同地在留韓人ノ一部ヨリ援助保護ヲ受ケタルカ如シ始メ哈爾賓南方ノ小停車場「ザイチアゴフ」ニ於テ事ヲ舉クルノ予定ナリシカ成

効ヲ保シ難カリシヲ以テ二組ニ分レ二名ハ「サイチアゴフ」ニ於テ公ノ通過ヲ待チ一名ハ哈爾賓ニ到レリ加害者ハ韓人ニシテ「インテル、アンガイ」ト称シ「カトリック」教徒ニ屬ス”とあり、サイチアゴフあるいはサイチアゴフは蔡家溝の露称であろう。またインテル、アンガイとあるのはウンチアンの訛であろう。 24) 『室田』P.270、前掲。

5. 背 景

明治8年(1875)の雲揚艦砲撃事件を機として開國を強要、不平等条約を締結せしめて以來、日本は時に謀略を用いて内乱を誘發せしめるなど、韓國における勢力の扶植に腐心し、日清・日露の兩戦役を通じて、まず清國、ついでロシアの勢力を駆逐し、明治38年(1905)ポーツマスにおける日露講和条約によって、日本が韓國を獨占的に支配する權限を、ロシアに認めしめた。すなわち、その第2条は“露西亞帝國政府ハ日本國カ韓國ニ於テ政治上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本帝國政府カ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導、保護及監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙シ又ハ之ニ干涉セサルコトヲ約ス(下略)”と述べ、これに基づき同年11月17日、第2次日韓協約が締結され、外交權の移讓と統監府の設置が決定した。このため排日の世論沸騰する中を、初代統監として伊藤が赴任した。明治40年、ヘーグ密使事件を契機として、韓皇(李熙)を讓位せしめ、新協約を結んで、内政の監督を強化し、42年7月には、司法および監獄の事務を、日本に委讓せしめ、韓國軍隊を解散した。こうして事實上の併合は、ほとんど完了し、韓國の獨立は全くの名目にすぎないものとなった。¹⁾

この間、韓廷を中心とする支配者層の多くは、いたずらに以夷征夷をこととし、党同伐異をくりかえすのみであったから、ますます日本のつけこむところとなった。このような動きに憤激して、皇帝に上疏し、あるいは悲憤慷慨して自殺した高官、兩班、儒生も少なくないが、大勢を覆すにいたらなかった。²⁾しかし、一進會などの運動を除き、排日の風は一般に瀰漫し、あるいは結社をつくり、あるいは新聞雑誌などによって、これを鼓吹した。³⁾そして軍隊解散を機として、各地にゲリラがひろがり、平定に手を焼く始末となったほか、在外韓國人もサンフランシスコ、ハワイ、メキシコ、ウラジヴオストク、ハルビン、上海などに、それぞれ排日団を結成し、本國と氣脈を通じて活動した。⁴⁾これら排日の韓國人の最も憎惡していたのが、侵略の張本と目した伊藤博文と、韓國人では保護条約などに調印した責任者李完用で、暗殺の主要目標となっていたのである。伊藤が滿洲行に先立ち、桂首相の招宴に臨んだ際、Japan Mail紙主筆英人 F. Brinkley⁵⁾の“時には往時危險の場合に身を處せしことを思ひ出さる⁶⁾

るならん”と問うたのに対し、“何時に限らず予の身は危険に曝され居れり。昔は少し位は命も惜しかりしが、今日となりては餘命幾何もなければ、國の爲とあらば何時でも喜んで死なん。予の懸念する最後の問題は韓國なれば、それさへ形が付けば安心なり”と答えたことばが、あたかも自らその識をなしたことも、伊藤自身が襲撃を十分予想するような情勢であったことを示しているであろう。

伊藤の死は韓國の朝野に大きな衝撃を与えたが、それはこれを機として、日本がどのような強行策をもって、韓國に臨むかを危惧したからであって、上下を擧げて陰に快哉を叫び、安重根を殉國の英雄として讃美する聲が、人々の間に高まるような情勢であったのである。⁹⁾

註

1) 明治期の日韓関係については、神川彦松監修・金正明編『日韓外交資料集成』全8巻10冊(未完)が、戦後ようやく公開可能となった極秘資料を多く含み、網羅的かつ基本的。年次的な日本側の根本資料としては、『日本外交文書』が明治期完結。概説書としては戦前に小松緑『朝鮮併合之裏面』(大正9年、中外新論社)、高權三『近代朝鮮政治史』(昭和5年、鋼鐵書院)など。戦後のものとしては、山辺健太郎『日韓併合小史』(1966年、岩波新書)およびその基礎となった個別的論文集『日本の韓國併合』(1966年、太平出版社)などがあり、いわゆる民間志士の活動を記したものに、黒竜會編『西南記傳』(明治41年)、同『日韓合邦秘史』(昭和5年)、同『東亞先覚志士記傳』(昭和11年)などがある。簡明な通史は旗田巍『朝鮮史』(1951年、岩波全書)。かんたんな文献解題は、日本國際政治學會編『日韓關係の展開』(昭和38年、有斐閣)にあり。

2) 山辺健太郎『日韓併合小史』P.188~190。『李朝実録』は併合後、篠田治策が委員長となって編纂したもので、日本にとって具合の悪い事實はほとんど省かれているが、高官等の上疏や自裁の記事は、かなり収録されている。たとえば『高宗實録』第9冊(朝鮮科學院、中國科學院、1959年影印本)の光武9年(1905)11月18日以降。李完用の傳記資料と遺文を収めた金明秀編『一堂記事』(昭和2年)P.48~50にも保護条約に反対した人士が列挙されているが、實録とは若干の出入がある。

3) 一進會は明治37年、日露戦争を契機として出現した政治結社で、李容九の組織した進歩會と、宋秉喆の率いる維新會が合体して成立した。(平凡社版『東洋歴史大辞典』「李容九」の項)。宋は李を會長に推しその名望を利用して、野心の實現を計ったものともいわれ、徹底して親日を標榜、日本軍に協力、後に日韓合邦の首唱者となった。黒竜會編『日韓合邦秘史』は李・宋等と内田良平、杉山茂丸、武田範之、菊地忠三郎等、いわゆる民間志士の連繫、活動を画いて詳細をきわめるが、山邊健太郎『日韓併合小史』P.229~234、『日本の韓國併合』P.251~270は、その欺瞞性を強調し、一進會はでっち上げられた幽霊團體で、李・宋等は私欲にかられた賣國奴である、ときめつけている。これに對して、日韓會談の進行中に出版された、李容九の遺子大東國男『李容九の生涯——善隣友好の初一念を貫く』(昭和35年、時事新書)は、當然のことながら、李や内田等の善意を高く評価し、かれらの念願した日韓の對等合邦の理想が、兩國權力者の手で無残に踏みにじられ、日本帝國主義による一方的な併合となつ

伊藤博文の暗殺をめぐる

たとしている。なお一進會とは、宋秉峻によれば、一致進歩の意味だという（小松緑『日韓併合之裏面』P.48）。

4) 朝鮮駐劄軍司令部『朝鮮暴徒討伐誌』（大正2年）P.35。“解散セル軍人ノ大部ハ地方ニ竄奔シテ暴徒ノ群ニ投シ永ク禍乱ノ焰ヲ終熄スルニ至ラサル因ヲナセリ。”なお同書によれば、ゲリラの討伐は明治40、41年に集中し、42年以降は急速に減じている。山邊『小史』P.204～214、『日本の韓国併合』P.330～349。

5) 『保護・併合』P.277～302。

6) 戦後、南北に分断された朝鮮では、ことごとくに反目、対立が目につくが、李完用に關する評価だけは、全く一致している。すなわち、李完用は日韓併合の責任者で、賣國奴であり、またその代名詞でもある。この點、戦前における内田良平等の評価——李は親露派から親日派に寝返った變節漢であり、一身の榮達・保身のほかは念頭にない俗物、オポチュニストに過ぎない——と奇妙に符合している。これと全く對立的な評価は、戦前における日本の政官界上層部のそれである。たとえば外務省から轉じて、伊藤・曾彌・寺内の3代の統監に仕え、日韓併合の機務に深く參與した小松緑は、李完用を評して“此の人は、吾輩の最も推服してゐる偉人の一人である。風采は餘り揚らない方で、才氣にも乏しいが、氣宇飽くまで潤達、時と共に移るの量あり、萬難を排して進むの勇あり、別けて、大勢の赴く所を察するの明に至っては、殆んど鬼神を欺くやうな趣があった。渠の先輩や同僚などが、進退の節を誤って、將棋倒れに、没落した間に、独り渠は、大勢に順應して終始其の身を全うした。渠は、當初、極端なる親露派であつたが、一旦豁然として悟ってから、今度は、極端な親日派となつて了つた。それは、決して一時の感情から、其の進退を二三にしたのではなく、時勢に従つて正道を迎える君子の豹變に過ぎなかつた”と口を極めて激賞している（『朝鮮併合之裏面』P.116～7）。また、甥、金明秀の編になる『一堂記事』——一堂は李完用の号——に序文を寄せた各界の名士（田中義一、齊藤實、水野鍊太郎、若槻禮次郎、副島道正、井上雅二等々）も、その人物を非常に高く評価している。

このように李完用に對する評価が全く對立している原因は、日韓併合が當時の客觀情勢から避くべからざるものであつたかどうか、の判斷にかかわるものであろう。もし然りとすれば、たとひ李完用が調印せずとも、誰かこれに代わる責任者が必要となつたであろうし、あえてこの任に當たる者がなければ、日本がどのような態度に出たと推測されたかが問題である。『一堂記事』を通讀すると、當時の情況から、いわゆる奴隸のことばで書かれているから、ほとんど表面に出てはいないが、李完用自身、決して併合を望んでいたのではなく、ただ誰かが條約調印の責任をとらなければ、一層苛酷な運命が朝鮮人を襲うことを恐れ、あえて一身に泥を被つたのではないかと想像される。

7) Francis Brinkley (1841—1912) は親日派ジャーナリストとして、日本を世界に紹介（岩波版『西洋人名辞典』P.1247）。『傳』P.915に「伊藤公の性格」という彼の追憶談がある。

8) 『傳』P.863～4。

9) 『保護・併合』P.265～274、とくにP.271～2の「遭難祝賀」の項を見よ。

6. 裁 判

伊藤の遭難にあたり、日本政府が最も焦慮したことは、裁判管轄權を日本が握るこ

とと、主犯を死刑判決に追い込むことであった。

すなわち、事件の発生した10月26日、在哈爾濱川上總領事より小村外相宛に、

“公爵加害者ハ目下露國憲兵ニ於テ國籍取調中ナリ韓國人タルコト判明スト共ニ當館ニ引渡ヲ受クル筈ナリ當館訊問ノ次第ハ隨時電報スヘシ右共謀者ハ九名アリテ當館留置場狹隘ノ爲收容シ難キニ付差當リ露國監獄ニ留置方依頼セリ右ノ次第ナルノミナラス目下本官モ負傷ノ爲當分執務シ得ス本年ハ當館予審取扱其他警護上等ニ於テ困難多シ就テハ本件處理上特別ノ取計方何分ノ御電訓ヲ請フ”¹⁾

と請訓したのに對し、行きちがいに小村から川上に對し、

“伊藤公ヲ狙撃セル兇徒ハ既ニ捕縛セラレタリトノ事ナルカ右ニ相違ナキヤ又其人數ハ幾名ナリヤ電報アリタシ右兇徒ノ逃亡ヲ拒ク爲必要ナル措置ハ十分之ヲ執ラルル様御配慮アリタク尚兇徒ノ予審調ヘハ當方ヨリ何分ノ義ヲ申進スル迄之ニ着手セラレサル様致シタシ兇徒ヲ愈々關東州ニ護送スル場合ニハ其逃亡ヲ拒ク爲憲兵若干名ヲ貴地ニ派シ貴地ヨリ長春迄露國汽車ニ乗込マシメタキニ付右ノ趣其向々ヘ斷リ置カルル様致シタシ”²⁾

と電訓し、さらに翌27日、重ねて

“伊藤公ニ對スル兇行者ノ處分ニ付テハ明治四十一年法律五十二條第三條ニヨリ本大臣ニ於テ關東都督府地方法院ヲシテ之ヲ裁判セシムルコトニ決シタルニ付貴官ハ右ニ關シ予審ヲ開カス必要ナル書類等ヲ整ヘ置キ都督府ヨリノ受取人ヲ待ち居ラルヘシ都督府ヨリハ受取ノ爲憲兵士官一名憲兵十名ヲ急派スル筈ニ付兇行者及連類者ハ憲兵著次第之ヲ露國官憲ヨリ引取り憲兵ニ引渡サルヘシ”³⁾

と命じ、29日にも

“往電第一三号（前引）ヲ以テ申進シタル如ク韓人ノ裁判ハ全部之ヲ都督府法院ニ移スコトナリ貴所ニ於テハ予審ヲモナスヲ要セサル次第ニ付若シ萬一予審ニ着手セラレ居ルトキハ直チニ之ヲ中止シ都督府派遣ノ憲兵ノ來着ヲ俟チ速カニ犯人ヲ旅順ニ護送セシメラルル様致シタシ連累者モ成ルヘク犯人ト同時ニ護送ヲ了スル様配慮アリタシ”⁴⁾

と訓令し、くどすぎるほどに領事裁判による予審の中止を命じている。これは事件の重大なるに鑑み、予審における被告等の證言が、關東法院におけるそれと矛盾し、裁判の進行を齟齬せしめることを恐れたからに相違ない。そもそも本件は、清國の領土内で發生した事件であるが、東清鐵道とその付屬地は、ロシアの治下法權下にあった。しかも、被害者は日本人、加害者は韓國人というきわめて複雑な事件であり、裁判管轄權がどこの國に屬するか、非常に微妙な問題をはらんでいた。しかしロシアは、裁

伊藤博文の暗殺をめぐる

判管轄權に關しては屬人主義をとっていたから、韓國人たる被告等の裁判權を放棄し、日本は裁判管轄權を主張しうる法的根拠を發見するに努めたのである。事態を重視した小村は、10月28日政務局長倉知鐵吉に、事情調査のため旅順出張の内訓を與え、倉地は31日旅順に向かった。⁷⁾

一方、被告等は11月1日、旅順へ護送された。すなわち、11月2日川上は

“昨夜旅順ニ向ケ護送ノ韓國被告人ハ下手人安成七ノ外金成玉柳江露卓大桂鄭大鎬^(ママ)宇連俊曹道先金麗水竝ニ其後露國官憲ヨリ引渡ヲ受ケタル金衡在ノ九名ナリ其他未タ引渡ヲ受ケサルモノ七名ハ目下溝淵檢察官當館ニ於テ取調續行中ナリ又目下ノ處露國官憲ニ於テ取調中ニ屬スル韓國人ナシ但シ引續キ捜査中ナリ⁸⁾”
と報告している。

旅順に着いた倉知は、11月7日、外務次官石井菊次郎に對し

“伊藤公ニ對スル兇徒ノ處罰ハ帝國刑法ニ據ルヘキヤ將タ韓國刑法ニ據ルヘキヤニ付目下都督府ニ於テ考究中ナル處右ハ檢察官ニ於テ公訴ヲ提起スルニ方リ之ヲ決定スルヲ要スヘキヲ以テ刑法三條韓清條約五條及先年在清領事ニ發セラレタル訓令等御參照ノ上本省ノ意見至急電報請フ⁹⁾”

と打電したのに對し、翌8日、石井から倉地に、

“清國ニ於ケル韓國人ハ韓國カ日本ノ保護國トナリタル結果帝國ノ法權ノ下ニ立ツニ至リタルモノナルカ故ニ其犯罪ハ刑法第一條ニ所謂帝國內ニ於ケル犯罪ト看做シ當然帝國刑法ヲ適用スヘキ儀ト思考ス刑法第一條第二條第三條ニ所謂帝國內外ノ區別ハ原則トシテ帝國領土内外區別ヲ指スモノナルモ帝國カ治外法權ヲ有スル國ハ帝國臣民ニ關シテハ刑法ノ適用上帝國ノ領土ト同視スヘキモノト解釈セラレ司法省トモ協議ノ上其旨昨年ハ三各領事ニ訓令シアリ帝國ノ法權ノ下ニ立ツ韓國人モ帝國臣民ト同一ノ地位ニ在ルモノナルカ故ニ等ク右ノ解釋ニ依リ差支ナカルヘク從テ清國ニ於ケル韓人ハ刑法第三條ニ列記セル犯罪ニ限ラス其他一切ノ犯罪ニ付帝國刑法ノ適用ヲ受クルモノト解ス¹⁰⁾”

と回答し、在外韓國人は日本の法權下にあるとの見解を示している。

この間、被告の訊問が進み、容疑者が歸分けられるとともに、主犯と目された安重根の極刑が企圖されていく。11月21日の倉地から小村宛の電報は、

“十九、二十日ノ兩日ニ亘リ一應殘餘ノ嫌疑者全部ノ訊問ヲナシタルモ別ニ得ル所ナシ今日迄ノ訊問ノ結果ヲ綜合スレハ安禹曹柳四人ノ外ハ兇行事件トノ關係極メテ薄キカ又ハ全然關係ナキカ如ク曹柳兩人モ亦關係全ク深カラサルニ似タリ安及禹ノ本件主動者タルハ最早明ナリト雖安ノ如キハ深く決心スル所アリト見エ苟モ他人ノ迷惑ト

ナルヘキコトハ之ヲ陰蔽シテ責ヲ一身ニ引受ケンコトヲ努メ有力ナル證據ヲ突付ケラ
ルルニアラサレハ容易ニ事實ヲ述ヘスノ如キ有様ナルヲ以テ浦鹽方面ニ於ケル捜査
ノ結果何等ノ證據ヲ發見スル迄ハ今後ノ訊問ニ於テ新事實ヲ發見シ難カルヘシト思考
ス右浦鹽ヘ電報濟¹¹⁾

と訊問がほぼ一段落したことと、安重根の健氣な態度を傳えている。11月30日には、

“安重根ノ匪行ノ惡ムヘキト其重刑ニ値ヒスルハ勿論ナリト雖同人カ今回ノ兇行ヲ
ナスニ至リタルハ敢テ私利ニ出タルニ非ルコト明カナルヲ以テ法院ニ於テハ或ハ之カ
刑ヲ無期徒刑ニ止ムヘシトノ論ヲ生スルコトナキヲ保シ難ク又禹連俊ノ行動ニシテ往
電第二三号(一)ノ末段ノ通ニテ其兇行ヲ斷念セルコト明瞭トナリタルトキハ其行為ハ犯
罪予備ノ中止ニ屬シ之ヲ罪スルニ由ナシトノ論法院内ニ起ルコトアルヘシト思考ス
右ハ何レモ純然タル刑ノ適用問題ニ屬スルヲ以テ行政部ヨリニ之ニ制肘ヲ加フルカ如キ
形跡ヲ避クヘキコト論ヲ待タスト雖安ヲ死刑ニ處スヘキヤ否ヤ等ノ如キハ事重大ニシ
テ其利害亦考慮ヲ要スヘキヲ以テ政府ニ於テ前記ノ點ニ關シ何等ノ御希望アラハ目下
本官ト法院當局間ノ關係良好ナルヲ機トシ法院内ノ議論未タ熟セス且安禹兩人ノ罪狀
尚確定セサルニ先チ内々御希望ノ次第ヲ本官ヲ經法院側ニ傳ヘラルルモ亦可ナランカ
ト思考ス就テハ若シ御希望ノ廉アラハ可成速ニ御内示ヲ乞フ¹²⁾

と極秘に請訓し、暗に安を死刑とし、禹を有罪とするよう、裁判所に働きかけてはどうかと意見を具申した。これに對し12月2日、小村は倉知に宛て、

“貴電三四号ニ關シ政府ニ於テハ安重根ノ犯行ハ極メテ重大ナルヲ以テ懲惡ノ精神
ニ據リ極刑ニ處セラルルコト相當ナリト思考ス又禹連俊カ中途犯罪ヲ斷念セルコト明
ナル以上ハ或ハ無罪ナルヘキモ關東都督府陸軍參謀部通信情報第六十三号ニ依ルトキ
ハ彼ノ蔡家溝ニテ目的ヲ達セサリシハ露國官憲ニ妨ケラレ室外ニ出ルコト克ハサリシ
ニ因ルモノト謂ハサルヲ得ス果シテ然リトセハ謀殺未遂罪ヲ構成セリト謂ヒ得ヘキカ
如シ御含迄尚ホ曹柳二人ニ付テハ別段ノ希望ナシ¹³⁾

と回答した。倉知は政府の希望を高等法院長に傳え、その意向を打診した結果、12月3日、

“貴電第二一号第一項ニ關シ 高等法院 長ニ交渉シタル 處同院 長ハ大ニ 當惑シ政府
ノ御希望ニ副フノ非常ニ困難ナルヲ説ケリ蓋シ法院側ニ於テハ裁判ニ必要ナル調査ハ
既ニ略ホ終了シタルモノト認メ其局ニ當レル者ハ一日モ速ニ事件ヲ審判ニ附センコト
ヲ熱望シ又法院ニ於ケル若手職員中ニハ司法權獨立ノ思想ヨリ法院カ政府ノ指揮ヲ受
クル姿トナルヲ憚ハス既ニ其氣色ヲ現ハス者スラアルヲ以テ高等法院長カ之ヲ操縱ス
ルニ困難ナルハ察スヘキナリ乍去政府ノ御希望モ亦尤ナルヲ以テ熟議ノ末院長モ遂ニ

其意ヲ了シ一先裁判ノ進行ヲ停止スルコトヲ承諾スルト同時ニ其停止ノ餘リニ長カラサルコトヲ希望シ且本官カー旦歸京シ政府及都督ト協議ヲ遂ケ大凡其停止期間ヲ定メシコトヲ要メ而シテ本官歸京ノ上ニテ政府ヨリ何等ノ申越アル迄ハ一切現状ヲ維持シ置クヘキコトヲ約セリ本官モ何レ其内歸京ヲ要スヘク此後ハ是非當地ニ留マルヘキ特別ノ必要ナキヤニ思考セラルルニ付旁院長ノ希望ヲ容ルルモ可ナラント思考シ之ヲ以テ白仁及明石ニ相談シタルニ何レモ之ニ同意セリ就テハ本官ハ來ル八日ヲ以テ一旦當地ヲ引上ケ九日ノ便船ニテ歸朝スルコトト致シタシ右ニテ御差支ヘナキヤ至急回電ヲ請フ¹⁴⁾”

と法院側の事情を述べ、高等法院長が政府の圧力と若手職員の叫ぶ司法権獨立の正論の板挟みとなって困惑していることや、政府の意向を再度確めるまで、裁判の進行を停止するに同意したことなどを伝え、さらに極秘として、

“貴電第二号本日高等法院長ト會見シ政府ノ御希望ヲ通シテ懇談ヲ遂ケ結局左ノ通打合セヲ付ケタリ右ハ申ス迄モナク蔽ニ秘密ト為シ置カレタシ

一、安重根ニ對シテハ法院長自身ハ死刑ヲ科スヘントノ論ナルヲ以テ政府ノ御希望モ之ニアル以上ハ先ツ檢察官ヲシテ死刑ノ求刑ヲ為サシメ以テ地方法院ニ於テ目的ヲ達スルヲ努ムヘク若シ萬一ニモ同院ニ於テ無期徒刑ノ判決ヲ與フルコトアルトキハ檢察官ヲシテ控訴ヲ為サシメ高等法院ニ於テ死刑ヲ言渡スコトトナスヘシ

二、禹連俊ノ件ハ政府御意思ノアルトコロ明瞭ナルヲ以テ法院ニ於テ今後禹連俊ニ對スル取調ヲ為ス際特ニ手心ヲ加ヘ同人ヲシテ犯罪ヲ斷念セルコトヲ主張スルニ由ナカラシムルニ努ムヘキコトトナスヘシ⁽¹⁵⁾”

と小村に連絡し、安をあくまで死刑に追い込むと同時に、禹を有罪におとすべき手筈の整ったことを傳えた。

以上の経緯によって明瞭なように、政府は法院に圧力をかけ、檢察官を指揮して、安の死刑と禹の有罪判決を獲得するために、万全の措置を講じておいたわけで、判決の要點は公判の開かれるに以前において、既に決定していたことがわかる。かくして、第4節に縷述したごとく、伊藤暗殺の真犯人としては、きわめて疑問の多い安重根の運命は、頻發する不祥事件に手を焼いていた日本政府の意思によって、公判前に決せられていたのである。

明治43年(1910)2月7日午前9時、關東都督府地方法院において、溝淵孝雄檢察官の冒頭陳述によって、公判は開始された。公判に廻されたのは、旅順に護送された容疑者9名の内、安重根、禹德淳(禹連俊)、曹道先、劉東夏(柳江露)の4名で、他の5名は關係なしとして除外されていた。公判は驚くべき速度で進行され、7日は安、

8日は禹と曹、9日、10日には劉の審問、檢察官の論告などが行われた。この公判廷において、安重根は彼の生い立ちや暗殺の動機・経過を、次ぎのように陳述している。

“余は本國に在りし時は安重根と云ひしが三年以前郷里を去りて浦潮に赴きてより安応七と改名す。余の父は安泰根と云ひて鎮南浦に在りし頃は進士の職にあり數千石の収入ある土地を有し居りしが數年以前より漸次費消し今は數百畝を残すのみ。父は五年前に死亡し母は現存す。猶弟二人あり定根、巨根と云ふ。^(ママ)妻は十六歳の時迎へ一女二男あり皆健在なり。余は幼時幸ひ自宅に於て私立學校を建て居りし為漢學を修めたり。其他余の讀書としては千字文、通鑑、孟子、童蒙選集等なり。外國語は仁川にて佛人の天主教宣教師コウシンフ(洪神父)氏に就き佛語を少しく學べり。其時より余は天主教に入れり。是余の十七歳の時なり。余が今回の目的を遂行せんと發意したるは遠く五年以前にあり。日本が露國と戰を交ふるに方り日本は東洋平和の爲なりと宣言したるを以て我韓國人は大に日本の爲に利益を圖り同胞にて其犠牲となりしもの少からず。然るに日露の講和成るや日本は韓國に統監を置き千八百九十五年に七箇條の日韓協約を結び尋で千八百九十七年に五箇條の協約を締結せり。^(ママ)是固より韓國皇帝の聖旨に非ず又大臣の副署なく全く伊藤統監の圧迫的斷行に出でたるものなり。之が為我同胞は大に憤慨し日本の横暴を世界に發表し且國權回復の爲飽迄も日本と戰はざる可らずと為せり。余も亦國家の爲め尽さんとして郷里を出でて三年の久しき排日思想を各地に鼓吹し且差當り伊藤統監の方針を根本的に破壊せざる可らず此目的を達するには是非共伊藤公を無きものとするより外なしと決心せり。尤も政治問題の如きは新聞紙の力を假るを便とする故一たび浦潮にある大東協報に論説を投書したることあり。同社の李甲は知人なるも余は筆を以て國家に尽す能はざれば是非伊藤公を殺さんと決意せり。恰も好し伊藤公が満洲に來遊するの新聞記事を見て友人李某より一百圓を借受け禹徳淳を誘ひ同伴して禹は六連發余は七連發の拳銃を携へ浦潮を陰曆九月八日(陽曆10月21日)朝出發して九日午前九時哈爾賓に着せり。途中ボクラニチナヤに下車し柳東夏を訪ね通譯を依頼する為同行す。柳に対しては事實を語らず。又哈爾賓に於て曹道先を訪ね同人をも同行長春若くは塞河口(蔡家溝)に向ひ南下せんと企てたるも旅費欠乏の為行動自由ならざりし”¹⁶⁾

“哈爾賓到着後禹徳淳と共に南下せんとしたるも旅費欠乏し僅に三十円を残すのみなれば禹及曹道先を伴ひ塞河口に至りしに偶在哈爾賓柳東夏より電報到着したるも電文不明にて要領を得ざるより安は禹と曹とを留めて陰曆十二日(陽曆10月25日)只独り哈爾賓に帰り十三日伊藤公同地着のことを新聞に據りて知りたれば今回こそは如何なる妨げある共是非伊藤公を殺さんと決心せしかど公爵は未だ曾て見たることなく一度

某新聞紙上に其肖像を見しのみなるも大概は見當もつくことならんと思ひ二十六日早朝午前七時頃停車場に到れば公爵を歓迎すべく露國官吏軍隊が右往左往準備に餘念なかりき。自分が當日の服装は今日の通りにてロシア製の背広服の上に同半コートを着し烏打帽子を戴き居りしが別段怪しまることもなく用意の短銃は右のポケットに収め置きたり。装弾は七八發と思へど確ならず。先づ九時まで二時間の間某喫茶店に入りて茶を飲みつつ公爵の來着を待ち狙撃の機会を得るには公爵が汽車より降りたる時とせんか又馬車に乗る時にせんかと考ふる裡に公爵を乗せたる特別列車着せしを以て急ぎ喫茶店を立出で見れば公爵は現に降車して露國の出迎武官等に挨拶し、夫より公は露兵の間を過ぎ各國領事団の方面に歩を進め被告も亦同じく露兵の後を徹行して機會あれと窺ふ際公は領事団の前より引返さんとせしかば好機逸す可らずとし直に露兵整列の間より約十歩隔てたる公爵の右側部を目蒐けて續け様に二三發々射したれど果してそれが公なりしや定かならず。漸く服装年齢舉動等に據りて判斷したるなれば多少躊躇せしも最早覚悟を定めて更に少しく銃口を左方に向け二三發を發射するや整列せる露兵は銃聲に驚き後方に退散し被告は露兵の前面に現れたり。此時露國騎兵二三名左右より支へたれば其勢にて共倒れとなり己むを得ず短銃を投出し大韓國萬歲「コレアウラー」を三唱し露兵憲兵の手に捕縛されたり。當時は公爵の死亡したることとは知らざりき”と。

此時裁判長より“當時自殺又は逃走する考へなりしか”と問へば

“予は一公爵を斃すを以て能事終れりと為さず。予は韓國義軍の參謀中將として韓國獨立東洋平和を完うするを終生の事業とするものなり。自殺又は逃走するが如き卑劣の振舞を爲さず。一刻の生をも永くし、日本の暴擧を世界に告表せんとするものなり”と彼は負惜みの大言を吐けり。裁判長は更に“汝の爲に公爵は卅分の後落命し他の隨行員三名は負傷したり。今に至り如何の感あるや”と問ふや“隨行員等の負傷は誠にお気の毒の次第なれど公爵の死は即ち予等年來の願望を果したる所以なり”と答ふ。又裁判長より“薬指の半ば切斷せるは如何”との問に對し彼は得意然として

“是れこそ即ち我等義軍の同志が昨年露領カリーに集合し韓國獨立の爲めに如何なる國難に遭ふとも必ず目的を決行すべしとの誓ひを以て同志團結の誓約を為し又同志の血を以て我國旗に大韓國獨立と大書したり。其の集合せる同志の重なる者は金基列、博樂吉、朴根職、金太連、安啓麟、李國世等なりしが今は四散して居所さへ明かならず。義軍の總大將とも云ふべきは金都世にて予は其部下なるが昨年露領沿海洲に於て會合せし時予に命ずるに露領一帶の同胞の司令官を以てし大に活動すべしと言へり。爾來予は各所に演説等を試み徐ろに機¹⁷⁾の至るを待ち居りしなり。”

さらに暗殺の理由としては

“伊藤公を殺害したるは個人の資格を以て行ひたるにあらず。韓國義軍の參謀中將として國家の爲又東洋平和の爲にしたるものなりと前日事實の審問當時に述べたる如く日本は日露開戦の當時宣言に背けること及び七箇條の日韓協約は彈圧的なること日本は東洋攪乱者たること伊藤公は前年閔妃を殺したる主謀者なること又公爵は韓國の外臣なるにも拘らず我皇室を欺き先帝を廢位したり。故に伊藤公は韓國に對し逆賊¹⁸⁾なると共に日本皇帝に對しても大逆賊なり。彼は先帝孝明天皇”

といいかけるや、裁判長は公開を禁じ、傍聴人の退廷を命じたのであった。しかし、伊藤暗殺の理由としては、明治42年11月7日に、倉知が小村宛に郵送し、15日接受された安の獄中手記が残されているので、彼がこの後、何をいわんとしたかを知ることができる¹⁹⁾。

いずれにせよ安重根は、日本の侵略的意圖を暴露し、その元兇として伊藤を弾劾すべく、果敢な法廷闘争を展開し、ほぼその目的を達した。これに対して判事は、判決理由に述べられているように、安の陳述のほとんどですべてを事実と認め、明治43年2月14日、つぎのような判決を下した²⁰⁾のである。

被告安重根ヲ死刑ニ處ス

被告禹徳淳ヲ懲役三年ニ處ス

被告曹道先劉東夏ヲ各懲役一年六月ニ處ス

當時の新聞は、判決廷の情景を次のように伝えている。

“伊藤公暗殺事件は愈々本日判決あり、安重根は死刑を申し渡され、殺人幫助罪によって禹連俊は三年、曹道先劉東夏の二人は各一年半の懲役に處する旨の判決あり、通譯より其旨を通ぜしに安は神色自若として更に意見あり申述べんとて裁判長に迫りしも通譯より異議あらば控訴期五日間内に於て其手續を為すべき旨を諭せり、劉東夏は早く家に返して下さいとて動かず廷丁より法廷外に抱へ出されたり²¹⁾”

被告等は控訴しなかったため刑が確定し、明治43年3月26日、安重根はみせしめに處刑された。時に31才。この年8月22日、日韓併合條約が調印され、韓國は名実ともに、日本の支配下におかれ、寺内による苛烈な武斷政治が展開されるのである²²⁾”。

(1966. 11. 11 稿)

註

1) 『文書』P.196～7

2) 同上、P.198下段、傍線は引用者、以下同。

3) 同上、P.199下段。明治41年法律第52条第3号とは“満洲ニ駐在スル領事館ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ國交上必要アル時ハ外務大臣ハ關東都督府地方法院ヲシテ其裁判ヲナサシムル事ヲ得”であるが、同法院は原則として、領事が重罪と予審決定したものについて、公判を行うことになっていたから、小村の決定は異例のものといえよう。明治42年10月30日の『東京日日新聞』も、大連29日發電として、この異例の措置を報じている。

4) 同上、P.199下段。

5) 裁判管轄権問題と、被告等をいかなる法律で裁くかという問題とは、公判においても弁護側の争点の一つとなった。この公判で裁判所の示した判断は、その結論ともいうべきものであるから、以下に引用しておく。“被告等ノ犯罪事實ニ付法律ヲ適用スルニ當リテハ先本件ニ關シ本院カ法律上正當管轄權ヲ有スルコトヲ説明セサルヘカラス本件ノ犯罪地及被告人ノ逮捕地ハ共ニ清國ノ領土ナリト雖露國東清鐵道附屬地ニシテ露國政府ノ行政治下ニ在リ然レトモ本件記録ニ添附セル露國政府ノ廻送ニ係ル同國國境地方裁判所刑事訴訟記録ニ依レハ露國官憲ハ被告ヲ逮捕シタル後直ニ被告ヲ審問シ尤モ迅速ニ證據ノ蒐集ヲ為シタル上即日被告等ハ何レモ韓國ニ國籍ヲ有スルコト明白ナリトシ露國ノ裁判ニ附スヘカラサルモノト決定シタリ而シテ明治三十八年十一月十七日締結セラレタル日韓協約第一條ニ依レハ日本國政府ハ在東京外務省ニ由リ今後韓國ノ外國ニ對スル關係及事務ヲ管理指揮スヘク日本國ノ外交代表者及領事ハ外國ニ於ケル韓國ノ臣民及利益ヲ保護スヘシトアリ又光武三年九月十一日締結セラレタル韓清通商條約第五款ニハ韓國ハ清國內ニ於テ治外法權ヲ有スルコトヲ明記セルヲ以テ右犯罪地及逮捕地ヲ管轄スル哈爾濱帝國領事館ハ明治三十二年法律第七十号領事館ノ職務ニ關スル法律ノ規定スル所ニ從ヒ本件被告等ノ犯罪ヲ審判スルノ權限アルモノト謂ハサル可カラス然ルニ明治四十一年法律第五十二号第三條ニハ満洲ニ駐在スル領事館ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ關東都督府地方法院ヲシテ其裁判ヲ為サシムルコトヲ得ト規定シアリ本件ニ在リテハ外務大臣ハ此規定ニ基キ明治四十二年十月二十七日本院ニ裁判ヲ移ス旨ヲ命令シタルモノナレハ即チ其命令ハ適法ニシテ之ニ依リ本院カ本件ノ管轄權ヲ有スルコト亦明白ナリトス

被告弁護士ハ日本政府カ前頭日韓協約第一條ニ依リ外國ニアル韓國臣民ヲ保護スルハ固ト韓國政府ノ委任ニ因ルモノナルヲ以テ領事館ハ韓國臣民ノ犯シタル犯罪ヲ處罰スルニ當リテモ宜シク之ニ韓國政府ノ發布シタル刑法ヲ適用スヘク帝國刑法ヲ適用スヘキモノニアラスト論スルモ日韓協約第一條ノ趣旨ハ日本政府カ其臣民ニ對シテ有スル公權作用ノ下ニ均シク韓國臣民ヲモ保護スルニ在ルモノト解釋スヘキニ依リ公權作用ノ一部ニ屬スル刑事法ノ適用ニ當リ韓國臣民ヲ以テ帝國臣民ト同等ノ地位ニ置キ其犯罪ニ帝國刑法ヲ適用處斷スルハ最モ協約ノ本旨ニ協ヒタルモノト謂ハサル可カラス故ニ本院ハ本体ノ犯罪ニハ帝國刑法ノ規定ヲ適用スヘキモノニシテ韓國法ヲ適用スヘカラサルモノト判定ス”（『保護・併合』P.263～4）。明治43年2月15日の『時事新報』紙上にも、ほとんど全文が掲載されている。東支鐵道付屬地の法權については、伊澤道雄『開拓鐵道論』下卷（昭和13年、春秋社）P.147～161、ロマンフ『満洲に於ける露國の利權外交史』（山下義雄訳、昭和9年）P.169～170。満鐵については伊沢、P.19以下。安藤彦太郎編『満鉄』（1965年）P.77～91、關東都督府の司法については『關東庁施政二十年史』（大正15年）P.226～238、溝淵孝雄『關東洲ニ於ケル司法』（大正2年、京都法学会）。6) 『文書』P.201上段。被告の地位、性行、党派、教唆者の有無など背後關係の調査を命ず。7) 同上、P.204上段。8) 同上、P.207下段～P.208上段。文中に見える検察官溝淵孝雄は、公判において冒頭陳述

を行っている。また註5)に引用した『關東洲に於ケル司法』の著者、京都大學法學部出身の法学士。

9) 『文書』P.208上段。

10) 同上、P.209上下段。9) 10) の解釈はそのまま5) に引用の判決理由に採用されている。

11) 同上、P.211上下段。

12) 同上、P.211下段～212上段。

13) 同上、P.212上段。

14) 同上、P.212下段～213上段。

15) 同上、P.213上段。

16) 2月7日午前中の陳述。2月8日『東京朝日新聞』。『暗殺史』P.340～2に引用さる。陳述中に天主教徒となったとあるが、教會や宣教師が排日を鼓吹した例は多數ある。『保護・併合』P.50～71。なお安重根の経歴などについては、末尾に付載した『不逞事件ニ依ッテ得タル朝鮮人ノ側面觀』所収「近世歴史＝安重根小伝」参照。

17) 2月7日午後1時に再開された公判での陳述。2月9日『東京朝日新聞』。『暗殺史』P.342～5。部分的には第4節に引用。装弾數も發射數も、目標も不明確なことに注意したい。ウラジヴォストクの排日韓國人の動静は『保護・併合』P.292～5、哈爾濱については同書P.295～7参照。

18) 2月9日の陳述。2月11日『東京朝日新聞』、『暗殺史』P.45。

19) 『文書』P.208上段～209上段。倉知發小村宛機密第一号の附屬書。明治42年11月6日午後2時30分提出。安応七の名で伊藤の罪惡15か条を列舉。その1として1867年孝明天皇の弑逆があげられている。2は1894年の閔妃殺害、3は1905年の日韓協約の脅迫による締結、4は1907年の新協約締結と韓皇を讓位せしめたこと、5は韓國の土地や産業を掠奪したこと、6は第一銀行券によって財政を枯渇させたこと、7は國債1300萬元を押しつけたこと、8は學校や書物を焼き、人民の聲を新聞に書かせぬこと、9は義士を十餘万も殺戮したこと、10は青年の外遊を禁じたこと、11は五賊七賊や一進会のやからに日本の保護が必要であるかのように云わしめたこと、12は1909年司法權を奪ったこと、13は韓國を日本の屬邦のように宣言したこと、14は韓國二千萬の生靈が塗炭の苦しみで喘いでいるのに、太平無事のようなことを云って明治天皇を欺いていること、15は東洋の平和を破り、無数の人々に滅亡を免れないようにさせたこと（原文は漢文）。大略以上15の罪状を記した後、“許多罪状不可枚舉而前後所行如是狡猾外失信義於列強内絶交誼於隣國欲為先亡日本後滅東洋全幅豈不痛哉東洋有志青年諸公深察之哉”と結んでいる。

20) 判決の全文は『保護・併合』P.257～265。裁判長は真鍋十蔵、書記は渡辺良一、檢察官は溝淵孝雄。

21) 旅順14日午後發電、2月15日『時事新報』、『暗殺史』P.348～9

22) 日本が韓國併合の方針を閣議決定したのは、第2節の註8) に記したように明治42年7月6日であった。伊藤の暗殺は10月26日、そして併合は43年8月22日である。併合の既成事實を積み上げていた日本として、この決斷に至る時間は長すぎるのではないか、その原因はどこにあったのかを考えてみると、一つは伊藤亡き後の國內の權力の調整、第二は關係諸國に対する思惑と打診などに時間が必要であったのであろう。『小村外交史』しかし第三として韓國内の排日反日の動きが、一方では併合の強行を日本に促すと同時に、他方ではその時機と方法について、慎重にならざるを得なくさせたためではないかと思われる。山辺健太郎『日韓併合小史』、

『日本の韓国併合』などを参照。なお後者については、朴宗根「朝鮮の主体的発展は？」（朝日ジャーナル、Ⅶ—46、1966.11.6）の書評を見よ。

資料一『不逞事件ニ依ッテ得タル朝鮮人ノ側面觀』

〔解題〕本書は高等警察課警視國友尚謙が、朝鮮總督府警務總長明石元二郎の命によって、初代總督寺内正毅暗殺の陰謀に加担した朝鮮人を取調べた報告書で、明治44年7月7日付けの明石の序文が巻頭にある。内容は反日独立運動の動静を、兩班・儒生、耶蘇教徒、學校、青年及學生、曲解の5項目にまとめて述べ、運動の中心が兩班・儒生から庶民、とくにキリスト教徒に移ったことを説いている。附録として、林載南と安明根（安重根の従弟）の自供があり、後者の末尾に、近世歴史と題する安重根の小傳を収録している。本論と関係があるので、この部分だけ抜萃して示すことにする。ちなみに本書は、當時の安樂兼道警視總監の旧蔵にかかわり、本學の和田香苗教授から筆者に恵与された。B.5判約160頁、竹筆様のもので墨書した原稿を、莚蕪版にとったものらしい。字詰めは不揃なるも、大体19字10行詰め縦書き、表扉の右上肩に極秘の朱印があり、その右にペン書きで“安明根ニ關スルモノ”という注記がある。

〔近世歴史——安重根小傳〕

左ハ兇徒安重根ノ行動ヲ記述シ寫本トシテ不逞者間ニ愛讀セラルルモノナリ書中威迫ニ遭フモ頑トシテ自白セス從容死ニ就ケリト虚構ノ事ヲ掲ケテ稱揚シアリ蓋シ各教徒^(ママ)ノ強情モ亦此寫本ニ倣ハントスルニアルモノナルヘシ頻リニ安重根ヲ稱賛シテ近世歴史ト題シ不逞ノ文字ヲ使用スルカ如キハ又以テ兇徒ノ意中ヲ忖度スルノ一資料タラスンハアラス

大韓隆熙四年四月十五日（明治四十三年）

近 世 歴 史 （作者不明）

安重根氏字ハ應七高麗安文成公ノ後ナリ海州ニ長ス腹部ニ七星ノ如キ黒子アルヲ以テ應七ト字ス祖父縣監諱ハ仁寿氏孝道友愛仁慈ヲ以テ一郷ニ名アリ一日某婦人ノ病急ナルモノアリ即チ自ラ血ヲ以テ其口ニ注ク乃チ蘇生シテ一年ノ寿ヲ延セリ父親進士諱ハ泰勲氏才學ヲ以テ一國ニ名アリ五歳ニ至リ父親及祖父ニ從フテ信川郡清溪洞ニ移リ家庭ノ教育ヲ受ケテ歴代史記ヲ學ビ長スルニ及シテ眼奇彩ヲ放チ音聲雄壯タリ慷慨ニシテ大節アリ区々タル生業ヲ事トセス甲午東學ノ乱ニ當リ其父親義兵ヲ募リテ其党ヲ伐ツヤ魁首元容日近洞ニ陣シテ將ニ清溪洞ヲ戮ラントシ勢甚タ急ナリ時ニ氏年十五歳十一月十六日弘曉六十餘名ヲ率ヒテ其巢窟ヲ襲殺シ飛彈雨ノ如シ氏勇ヲ奮フテ縱横馳突シ大ニ敵ヲ破ル賊四面ニ散シ一戰シテ大功ヲ奏ス是ヨリ胆力日ニ加ハル氏ハ獵ヲ好ムノ特性アリ一タヒ天ニ向ツテ射レハ飛鳥随テ落ツ十七歳ニシテ天主教ノ洗礼ヲ受ケタ

ル後ハ守戒ヲ謹ミ恒ニ謂テ曰ク東國聖教ノ歴史ヲ觀ルニ假令平日熱心ナル信者モ乱ニ當リ刑ヲ以テ脅カセハ則チ主ニ背ヒテ生ヲ圖ル真ニ慨惜ナリト光武九年日人強制ヲ以テ五條約ヲ締結スルヤ憤ニ勝ヘスシテ曰ク國茲ニ至ル安ソ坐シテ之ヲ見ンヤト即日清國ニ赴テ列國ノ形勢ヲ察シ當世ノ豪傑ニ親ヲ交ヘ明春國ニ還ル時ニ既ニ父親世ヲ別ス哀痛極リ無ク三月廬ニ侍リ至誠ヲ以テ天主ニ祈ル又二帝ト鎮南浦ニ移リ忠義ヲ以テ同胞ヲ動シ教育ノ奨勵ヲ以テ事トシテ寧日無シ其港口ノ童謡ニ曰フ

「白頭山ハ平地トナリ漢江ノ水ハ渴ルルモ安氏兄弟愛國ノ誠ハ滅セシムル能ハサラ
ン」ト

大邱ノ人徐相敦氏ノ國債報償ヲ發起スルヲ聽キ夫人及兩弟嫂ニ謂テ曰ク國既ニ茲ニ至ル又何ヲカ惜マンヤ嫁セル時携フ所ノ飾品ヲ出シ其萬一ニ補セヨト皆慨然トシテ之ヲ諾ス平壤府ニ到ル紳士千餘名明倫堂ニ集會シテ國債報償金ヲ募集ス日巡査輩傍觀シテ嘲弄冷笑ス氏大ニ怒テ曰ク倭奴焉ソ我大韓ノ大事ヲ知ランヤト瓦礫ヲ投シテ猛打ス彼等竄遁ス抑モ氏ハ意氣人ニ過キ日人ノ同胞ヲ虐待スルヲ見テハ必ス大責之ヲ乱打セリ光武十一年猝ニ大變アリ四面修羅ノ巷ト化シ三千里ノ江山ヲ顧ミレハ其形消ヘナントス氏ハ將ニ遠クニ行カントス其意ヲ知レル親友等之ヲ江ノ汀ニ送り酒ヲ舉ケテ之ニ勸ム氏杯ヲ取り地ニ擲チ痛哭シテ曰ク此身大韓ノ獨立ヲ恢復スル能ハスンハ復タ此江ヲ超ヘスト即日元山港ニ赴テ向フ所ヲ定メ北間島ニ入リテ同胞ヲ尋ネ又浦港ニ向フ時ニ有志ノ士遠ク來ツテ歡迎ス抑モ此港口及其附近ニ在ル者数十万ヲ越エト雖モ教育思想ナク又新聞紙ヲ閱スル者殆ント稀ナリ即チ慨嘆措ク能ハス到處赤誠ヲ吐露シテ或ハ演說シ或ハ譬喩シ或ハ煽動ス衆惑セサル者無シ是ニ於テ大東共報ニ讚成シ二十餘處ノ学校完全ニ設立スルヲ得タリ嗚呼是レ果シテ誰ノ功ソヤ

清國吉林省及哈爾賓ニ巡遊シテ忠義ノ士ヲ糾合シ將ニ徐ニ義兵ヲ舉ケントス此時ニ當リ内地同胞ノ魚肉ノ慘實ニ聞クニ忍ヒス怒氣天ヲ衝キ憾慨胸ニ塞ル露國領地煙秋ダヂチブニ於テ同志者十一名ト斷指同盟ヲ為シ淋漓タル鮮血ヲ以テ大韓獨立ノ四字ヲ大書シ又趣旨書ヲ作リテ義兵ヲ募ル應スル者雲ノ如クニ至ル衆望ヲ以テ參謀中將ト為リ三百餘名ヲ領卒シテ自ラー大兵ヲ作シ北間島ヲ過ク我兵日本ノ商人及一進會員ヲ見テ必ス之ヲ殺サントス氏義ヲ以テ之ヲ諭ス衆之ニ服ス會寧ニ到リ先ツ一支部ヲ檢ニ伏シ數十人ヲ出シ以テ日兵ヲ誘フ日兵見テ以テ寡シト爲シ出テテ急ニ追フ時ニ山腹ノ伏兵一齊ニ猛烈ナル射撃ヲ爲シ天地爲ニ震ヒ日兵一瞬間ニシテ數百名之ニ斃ル其後或ハ奇兵ヲ用ヒ或ハ疑兵ヲ放チ東西ニ應シ前後ニ殺シ日兵ノ前後ニ死傷セル者千餘名我兵死者僅ニ十餘名ナリ抑モ氏ノ兵ヲ用フル頗ル奇ナリ銃法亦精妙ヲ極メ百發百中空彈ナシ日兵之ニ怯レテ十餘日ノ間敢テ戰ヲ挑マス須臾ニシテ各道ノ日兵雲ノ如クニ集リ其數

知ル可カラス満山遍野我ヲ圍ミ勢甚タ急ナリ終日苦戦ノ後北ニ向テ走ル體疲レ足重フシテ顛倒シ人事ヲ知ラス忽然一條ノ光天ヨリ降り聖母マリヤ降臨シ背ヲ撫シテ曰ク汝ヨ起キヨ今ハ死セサルヘシー嶺ヲ超ヘンニハ汝ノ同盟者等ニ逢フヘシト慰勸ニ訓戒シ忽然トシテ見ヘス驚キ醒メテ四面ヲ顧レハ日兵既ニ在ラス精神新ナリ急行シテ救ヘラレタル所ニ至ル果シテ敗殘ノ義兵屯聚セリ其來ルヲ觀ルヤ一喜一悲前日ノ勇ヲ倍シテ終日接戦ス然レトモ日兵ノ大勢ニ敵スヘカラス功ヲ奏セスシテ日西山ニ落チ四面楚歌湧ク嗚呼蓋世ノ英雄亦奈何セン是ニ於テ昼夜ヲ分タス退却ス風ニ食シ露ニ臥シ饑渴甚シ日兵處々ニ監視シテ危險云フヘカラス幸ニモ負傷タニセサリシモ四十日間僅ニ二度ノ食ヲ得而モ歩行常ノ如シ豈レ人力ナランヤ從フ者ヲ顧ルニ二人ノミ喟然トシテ嘆シテ曰ク君等死地ニ陥リテ猶ホ天主ヲ知ラス實ニ憐ム可キノミト天主教ノ礼節ニ依リ余カ教ヲ受ケヨト二人之ニ從フ是ニ於テ日ニ百餘里ヲ行キ某村ニ到ルニ一進會員十余人突撃シテ捕縛シ直ニ銃殺セントス氏大ニ叱シテ曰ク此賣國賊ヨ我今日汝ノ手ニ死スト雖モ汝等一同ハ我同志者ニ鑒殺セラレト彼等黙スルコト半時ニシテ謝シテ之ヲ放ツ斯ノ如クシテ九死ニ一生ヲ得テ浦港ニ達シ其身ヲ顧ルニ衣服ハ悉ク腐レテ縊褸トナリ兩足ノ皮肉履ニ密着シテ離レス百折不屈ノ志ヲ以テ再ヒ兵ヲ舉ケントシタリシカ此時既ニ隆熙三年十月ナリ鄭大鎬氏ニ托シ妻子ヲ哈爾賓ニ招カントセリ會々大東共報ヲ閱スルニ伊藤博文某日哈爾賓ニ來ルヲ報ス私ニ罵ツテ曰ク老賊正ニ我手ニ死セント禹德淳氏ト慷慨悲憤ノ歌ヲ唱ス其歌ニ曰ク

大夫處世兮其志大矣	雄視天下兮何日成業
時造英雄兮英雄造時	東風漸寒兮壯士義熱
憤慨一去兮必成目的	鼠竊伊藤兮豈背比命
豈度至此兮事勢固然	同胞同胞兮速成大業
萬歲萬歲兮大韓獨立	萬歲萬々歲大韓同胞

十月二十六日蔡家溝ニ至リ酒店ニ於テ禹德淳曹道先氏ト易水ノ歌ヲ唱ヘ流涕シテ生別シ哈爾賓ノ茶店ニ於テ汽車ヲ俟ツ既ニシテ伊藤博文ノ塔乗セル列車ハ爾賓ニ達ス唳々タル軍樂聲裡ニ列國ノ軍人敬礼ヲ行フ伊藤車ヲ下レハ迎接者四方ニ擁圍シ甚タ森嚴タリ氏ハ軍隊ノ隙ニ飛フカ如ク馳セ寄り七連發ノ拳銃ヲ三發シテ三中シ尚ホ三發シテ官員三名ヲ傷ク軍人等之ニ驚イテ潰走ス是ニ於テ英語ヲ以テ大韓獨立萬歲ヲ三唱セリ此時露國兵丁氏ヲ縛シテ日人ニ送附ス蓋關東都督府ノ裁判權ノ及フ所ナリト云フニ在リ即チ之レヲ旅順口監獄署ニ押送ス途中ノ警戒嚴重ヲ極メ巡查輩之レヲ虐待セントシタルモ其氣象ノ嚴正ナルヲ見テ敢テ手ヲ下ス者ナシ此時ニ當リ靈性ノ鍊磨尋常ニ超ヘ飽食熟睡鼾聲雷ノ如ク起臥常ノ如シ衆皆其豪膽ニ驚ク紙筆ヲ請ヒ真奸腸ト題シテ伊藤ノ

罪惡十五條ヲ擧ク其弟貞根恭根ノ兩氏見コ骨肉ノ情不言ノ裡ニ見ハル其母堂ノ訓戒ヲ傳ヘテ曰ク汝國ノ為ニ身ヲ獻ス死スモ恨ナシ母子此世ニ相逢ヲ得スト雖モ後日天堂ニ相見ント從弟明根氏後面會ス手ヲ握テ笑テ曰ク思ハサリキ此所ニ相見ントハト快談約數時間ニ亘ル海外在留ノ同胞等五萬餘門ヲ募リテ英露西三國ノ弁護士ヲ聘シ平壤安秉燦氏ハ義務ヲ以テ自願シ以テ公判ノ日ヲ待ツ然ルニ法院ニ於テハ外國弁護士ハ悉ク之ヲ斥ケ日人弁護士ヲ撰定シ被告ノ望ム所ヲ容レス裁判制度ノ甚タ不完全タルノミナラス無智其極ニ達シ隆熙四年二月七日公判ヲ開始ス傍聽人數百名ニ上ル檢察官ノ審問ニ對シ謂テ曰ク曩ニ日露ノ開戦ニ當リ日本皇帝ノ宣戦ノ詔勅ニ曰ク韓國ノ独立ヲ扶ケ東洋ノ平和ヲ維持スト其日軍戰勝ツテ還ルヤ韓國ノ獨立愈鞏固ヲ臻スヘキヲ確信セリ然ルニ伊藤ハ韓國ニ大使トシテ來リ一進會ノ兩頭領ニ多額ノ金錢ヲ與ヘテ宣言ノ凶書ヲ發表セシメ兵力ヲ以テ皇室及政府ヲ威脅シテ五條約ヲ迫リ我皇帝陛下ハ之ヲ裁可シ給ハス參政大臣ハ調印セス唯所謂五賊ノミニ贊ス斯ノ如ク無効力ナル條約ヲ完全ニ成立シタリト自称シ以テ堂々タル我大韓ノ國權ヲ奪ヒ四千年ノ國家二千萬ノ生靈塗炭ノ禍ヲ免レサルニ至ル豈憤慨セサルヘケンヤ全國ノ人民ハ一切ニ憤ヲ含ミ一切ニ不服ヲ唱ヘ有志ノ士ハ時事ヲ痛論シテ或ハ上書シ或ハ長書シ忠憤抑ユルニ由ナク或ハ自刎シ或ハ牢死シ或ハ餓死ス斯ノ如キ者其幾十ナルヲ知ラス四方ニ義兵蜂起シテ死シタル者其幾十萬ナルヲ知ラス然モ之ヲ以テ足レリトセス復ヒ強制ヲ以テ七條約ヲ締結シテ軍隊ヲ解散シ太皇帝ヲ廢位シ司法權ヲ委任ナル名義ニ於テ之ヲ奪取シ加之國內總ヘテノ利源ハ一切之ヲ奪フ韓國人民ハ上下ヲ問ハス其冤痛骨髓ニ達シ切齒心ヲ腐ムレ独リ韓國ノ不幸タルノミナラス又東洋全局ノ大不幸ナリ伊藤ノ罪惡斯ノ如ク天ニ達セリ然カモ猶ホ其奸譎ナル手段ヲ以テ日本ノ保護政策ハ韓國人民ノ謳歌スル所ナリト扮飾シ各國ニ發表シテ世界ヲ欺ク韓國有志ノ士ハ伊藤ノ奸惡ナル行為ト韓國人民ノ不平トヲ發表センカ爲外國ニ出遊スル者多シ余以テ先ツ伊藤ヲ除テ後韓國ノ獨立ヲ恢復シ東洋ノ平和ヲ維持スヘント今ヤ其目的ヲ達ス抑モ君辱メラレテ臣死スハ丈夫ノ常ナリ死何ソ恨マンヤト又曰ク今回義兵參謀中將ノ資格ヲ以テ哈爾賓ニ獨立戰爭ヲ開始シ敵將伊藤ノ白頭ヲ我軍中ニ擧ケントシタルモノナリ決シテ個人ノ資格ヲ以テ爲シタル行爲ニ非ラサルナリ大韓帝國義兵中將今日敵ノ爲ニ虜セラル此所ニ於テ審問等ヲ爲スハ大ニ不可ナリト又曰ク余ノ外國ニ出遊スル目的ハ常ニ我同胞ヲ誘フテ忠君愛國ノ思想ヲ喚起シ國權ヲ恢復スルマテハ如何ナル困難ニ遭遇スルモ之ニ耐ヘ戰闘ニ從事スルヲ誓ヒ壯丁ハ日兵ト戰ヒ老人ハ職業ヲ勵ミテ軍糧軍需ヲ充分ナラシメ童蒙ハ教育ヲ努メテ後備ニ充テ実業ヲ勸メ農家ハ農ニ力メ商家ハ商ニ力メ或ハ劍ヲ以テ或ハ舌ヲ以テ或ハ血ヲ以テ國家ノ急ヲ拯フハ是レ國民ノ義務タルコトヲ自覺セシムルヲ以テ事ト

スト又曰ク當時急ナラサリセハ我独立隊ノ義勇軍ヲ以テ哈爾賓ニ出陣シ堂々ト攻撃シ
 タラン又能フヘクンハ兵艦ニ乗シテ對馬島海峡ニ向ヒ大砲ヲ以テ伊藤ノ汽船ヲ撃沈シ
 テ凱歌ヲ奏スル計策ナリシナリト又曰ク余ハ四千載ノ我祖國ノ為ニ二千万ノ我同胞ノ
 為ニ東洋大局ノ平和ノ為ニ我民族ノ權利ヲ奪取シ我東洋ノ平和ヲ攪乱セシ奸惡ナル逆
 賊ヲ斃セリ余ノ目的ヤスノ如クニ正大ナリ故ニ余ハ國民ノ義務トシテ身ヲ殺シテ仁ヲ
 成サント欲セリト日人弁護士辯シテ曰ク被告安ハ智識足ラスシテ國家ニ忠誠ヲ致スノ
 方法ヲ誤リ伊藤公ヲ殺害シタルハ日本ト韓國トノ保護政策ヲ誤解シタルモノナリ實ニ
 同情スヘキ点アリ又之ヲ極刑ニ處セハ批評ヲ免レス故ニ三年懲役ニ處セラレタシト弁
 シ了ルヤ安氏ノ陳述シタル大要ニ曰ク伊藤ノ罪惡ハ既ニ之ヲ論述セリ余ハ東洋ノ平和
 及韓國ノ獨立ノ為一命ヲ擲テ事ヲ行ヒタリ余ハ決シテ彼檢察官並ニ弁護士ノ言ノ如ク
 伊藤ノ政策ヲ誤解シタルモノニアラス又個人ノ恨ヲ以テ行ヒタルモノニアラス故ニ余
 ニ對シテ普通ノ死刑被告トシテ取扱フヘカラス國際公法及萬國公法ニ依テ列國環視ノ
 裡ニ審判ヲ行フヲ至當トスト

抑モ列國弁護ヲ許ササリシ理由ハ伊藤ノ行為ヲ攻撃センコトヲ忌憚シタリシ為ナリ然
 ルニ安氏ハ伊藤ノ罪惡ヲ論シテ曰ク独リ韓國ノ逆賊タルノミナラス日本ニ取リテモ大
 逆賊ナリ「日本先帝ヲ殺害」ト言未タ了ラス公安ヲ紊ルモノトシテ直ニ傍聽ヲ禁止セ
 リ

公判前韓國語ニ精通セル日人等獄中ニ來リ甘言ヲ以テ誘フテ曰ク伊藤ノ政策ヲ誤解
 シタルモノナリト陳述セハ無事放免セラルヘシト又脅シテ曰ク伊藤公ハ東洋ノ平和ヲ
 維持シ韓國ノ為ニ功ヲ奏スルコト多大ナリ然ルヲスノ如キ暴力ヲ以テ殺害シタルハ實
 ニ東洋ノ平和ヲ攪乱セシムルノミナラス今ヤ韓國人モ憤慨シ西洋人モ之ヲ恨メリト或
 ハ叱シ或ハ駭セリ一日問フテ曰ク同志ノ者幾人アルカト對テ曰ク汝ノ國一億萬円ノ予
 算ヲ計上シタル後此事ヲ問ヘ如何トナレハ我同志ハ數十万人ニ過ク悉ク之ヲ捕ヘント
 欲セハ監獄ヲ萬間ニ増築スルニアラスンハ之ヲ収容スルニ足ラサレハナリ又一日十人
 宛裁判セントセハ百餘年後ニアラスンハ之ヲ畢ル能ハスト又問フテ曰ク幾萬円ノ賞
 ヲ貪ツテ此事ヲ行ヒシヤト冷笑シテ曰ク抑モ財産ノ慾ハ肉身ノ樂ヲ取ランカ為ナリ余
 ハ生命ヲ顧ミスシテ今日ニ及ヘリ金錢ヲ求メテ何ヲカナサン彼魔鬼ノ計策奸狡ナリト
 雖金石ノ如キ心霜雪ノ如キ節ヲ如何センヤト

二月十四日ハ安重根等判決ノ日ナリ亡國ノ恨ヲ懷キ獨立自由ノ四字ノ爲ニ身命ヲ擲
 チ死生ヲ顧ミサル愛國憂世ノ士世界ノ耳目ヲ驚カシメタル人ノ判決如何ト傍聽者雲集
 セル中ニモ韓國人安秉燦氏安重根氏ノ兩季氏其從弟明根氏席ニ參セリ裁判長被告四名
 ニ對シ判決ヲ宣告ス安重根ハ死刑ニ禹德淳ハ懲役三年ニ曹道先柳東夏ハ各懲役一年六

個月ニ處シ此判決ニ對シ不服ノトキハ五日內ニ控訴スヘント安氏死刑ノ宣告ヲ受クルモ平然トシテ顔色前ノ如ク徐ニ曰ク之ヲ知ルヤ久シ汝等能ク我肉軀ヲ殺サン而モ我心ヲ殺ス能ハス死刑以上ノ刑ハ無キヤト冷笑シテ獄ニ歸ル觀ル者其神容膽氣ニ服セサルハナシ日本弁護士控訴センコトヲ勸ム氏色ヲ正フシテ曰ク之レ命ヲ惜ムモノナリ爲スヘカラスト兩弟ニ謂テ曰ク余死シナハ哈爾賓公園ノ傍ニ埋メ以テ亡國ノ士ヲシテ悟ル所アラシメ大韓ノ獨立ヲ見ルマテハ故國ニ還葬スルコト莫レ唯一ノ重大ナルコトヲ托スヘキアリ我主耶蘇誕生ノ日ニ死セント欲スト法院ニ願フテ許サル

仏國人洪神父三月七日旅順ニ着シ天主教ノ礼節ニ依テ礼ヲ獄中ニ行フ最モ嚴肅ヲ極ム日人ノ參列スル者十餘人氏洪神父ニ謝シテ曰ク余平日ノ願今日畢ル又何ヲカ望マンヤト

抑モ氏ノ靈特ナル品格ニハ日人ノ心腸ノ若キヲ以テスラ之ヲ恭ヒ之ヲ敬シ常ニ上等ノ料理ヲ供シテ其正誠ヲ表シ高等官吏等ハ帛ヲ捧ケテ其筆蹟ヲ求メ記念トシテ之ヲ珍重セリ一日法院長ト談シテ曰ク余カ伊藤ヲ殺害シタルヲ以テ惡事ト思フ勿レト筆ヲ執リ歌テ曰ク

天地翻覆志士慨嘆 大厦將傾一木難支

東洋平和論及自傳ヲ著シ將來ノ形勢及無限ノ懷抱ヲ述ヘタルニ日人ノ押収スル所ト爲リ同胞ヲシテ其高壯ナル議論ニ接スル能ハサラシム豈痛ム可ク惜ムヘキコトナラスヤ

四十餘日節ヲ守リ祈禱シタル其誠正天ニ達シ談話ノ間英彩容ニ見ハレ人敢テ仰キ見ルモノナシ

三月二十五日ハ骨肉ノ親永別スルノ日ナリ從容トシテ正大ナル態度ヲ以テ兩季氏ヲ戒メテ曰ク吾カ死後ハ母上ニ孝ヲ竭シ我二千萬ノ兄弟姉妹ニ余ノ言トシテ教育ヲ奨励シ實業ニ努メ國權ヲ恢復シ死者ヲシテ憾無カラシメ又冷淡ナル教友等ヲシテ信仰篤カラシメヨト

三月二十六日 三月廿五日ハ我皇帝ノ
誕生日ナルヲ以テ延期 死刑執行ノ時大韓衣服ヲ着シ満面和氣ヲ湛ヘテ大韓獨立萬歲東洋平和萬歲ヲ三唱シ靈魂蔽カニ天ニ昇ル此日兩季氏其屍ヲ請ヒタルモ法院ニ於テ許サス乃チ司法官ニ對シテ其野蠻ヲ責メ即日歸國ノ途ニ上ル日人等其日旅順口ノ附近ニ埋葬セリ

當日午後八時半白虹帛ノ如ク東天ヨリ西ニ向テ現ハレ二時間ノ後消ユ默禱スル者多シ當日韓國ノ男女流涕セサルモノナク慷慨ノ士ハ切齒痛恨シ密ニ追悼會ヲ行ヒ以テ其誠忠大節ヲ紀念シ或ハ心中喪ニ服シ或ハ祭事ヲ行ヒ寫真館ニ於テ氏ノ肖像ヲ發賣シタリシニ治安妨害ヲ名トシ内部ニ於テ禁止セリ

伊藤博文の暗殺をめぐる

嗚呼大丈夫ノ英風大節稟々タル生氣アリ独立ノ精神ヲ二千萬同胞ノ腦裡ニ銘セリ豈
壯快ナラスヤ

読者慷慨ノ情ニ堪ヘス茲ニ歌テ曰ク

首陽山ハ蒼々タリ	錢塘水ハ洋々タリ
人傑ハ至靈ナリ	古今何ソ異ナラン
中夜乾坤ヲ顧ルニ	東南ノ風猛烈ナリ
青丘江山小ナリトモ	尺寸之兵無カラシヤ
博浪士鐵槌ノ聲ニ	六國ノ英雄興リ
哈爾賓ノ朝銃聲ニ	東洋ノ地震動ス
汝如何ニ強暴ナルモ	天意人心ヲ如何セン
^(ママ) 王莽董卓大逆不道	遺醜萬年免レンヤ
文天祥ノ精忠大節	流芳百世美ナルカナ
弔ハン哉弔ハン哉	萬古ノ忠魂ヲ弔ハン哉
男兒ノ肝腸今日ニ	碎ケントテモ何カアラン
空山明月彼ノ杜鵑	故國ノ興亡汝知レルヤ
武陵桃園ノ深キ眠	イサ速カニ醒サン哉
二千万人我兄弟	独立ノ精神ヲ奮ヒ興シ ^(ママ)

了

<あ と が き>

伊藤博文の暗殺者は安重根である、と一般にひろく信じられてきた。この事件に言及した内外の文献は、ほとんどこれに疑問を懐いていない。しかし、この小論の中で論じたように、安重根犯人説には大きな矛盾がある。伊藤に盲管銃創を与えた3發の彈丸だけを例にとっても、もしそれが拳銃彈でなく騎兵銃彈であったとすれば、安は犯人ではあり得ない。そこで小論では、ロシアの官憲によって、前日蔡家溝で目撃されている、騎兵銃を持った3人づれの韓國人を、真犯人であると推定した。しかし、もっと感ぐった見方をすれば、韓國併合に消極的である、と見られていた伊藤を抹殺することによって、併合促進を企圖した日本國內の黒幕が、その真犯人である可能性も皆無ではない。

いずれにせよ、安重根は犯人ではあるまい。それにもかかわらず、安が自ら進んで犯人たることを自認しているのはなぜか。安が伊藤と信じた人物に、拳銃を發射したのは事實である。そして捕縛後、伊藤の死を聞かされた。彼の脳中で、自己の狙撃と伊藤の死との結びつきが、のびきならない事實として、信じこまれるにいたったとしても不思議ではない。そのうえ、日本政府の意を体した検察官や裁判官が、安を犯人とすべく、誘導訊問を行った可能性が大きいのである。安の自供内容と、判決に見られる犯行の説明が、ほとんど完全に一致しているの

平 川 紀 一

も、裁判所側が構成した犯罪事実を、安に信じこませるように仕向けた結果と考えられよう。こうした仕組みれた裁判によって、公判はわずか8日間という超スピードで終結し、安は予定通り處刑された。そして一方、韓國人から安は殉國の英雄に祭り上げられることとなる。

以上、小論の要約を兼ねて、解釈の補足を若干加えた。なお本稿の執筆には、本學特別研究費の援助を得たことを付記して、感謝の意を表する（11、14記）。

（本学教授）